

# あゝ出子

ポリオ・プラスのツネさんとミネさん



東京麹町ロータリークラブ

## 復刻に寄せて

わが東京麹町ロータリークラブは2018年6月17日をもって創立50周年の大きな節目を迎えます。

この50年間の中で、わがクラブが世界に誇れる最大の活動は、山田彝、峰英二両会員が身命を賭して自ら活動を始め、その尽力の結果RIの最重要活動に至ったエンド・ポリオでした。

エンド・ポリオも終局に至った現在、両会員の人となりを十分に知ることができる本書を復刻し、より多くのロータリアンの皆様にお読みいただければと存じます。

2016年4月

東京麹町ロータリークラブ

2015-2016 会長 地 引 恒 夫

50周年記念実行委員会

委員長 木 元 尚 男

同ポリオ担当委員会

委員長 藤 谷 護 人

同記念誌担当委員会

委員長 莊 村 明 彦

# 想　　い　　出　　草

ポリオ・プラスのツネさんとミネさん

目	次	頁
・山田彝・峰英二両会員の思い出集出版について		3
・山田　彝会員のプロフィール		5
・峰　英二会員のプロフィール		7
・「山田・峰社会奉仕賞」のしおり		9
山田・峰社会奉仕賞について		

## 第1部（クラブ外編・順不同・敬称略）

1. 山田さんの書簡から	1984~85年度地区がけ- 東京城北RC	近藤正夫	11
2. 山田さんを思う	1992~93年度地区がけ- 那覇西RC	松島寛容	21
3. ツネさんのこと	1984~85年度地区幹事 東京練馬西RC	戸田一誠	24
4. 南インドに陽がさして	1992~93年度地区幹事 那覇西RC	大宜見　齋	27
5. ツネさんの思い出	日本オメガス委員長代行 東京南RC	松阪麻樹生	33
6. テディーの思い出	グアムTUMONBAY RC	FRED ESTABROOK	35
7. 人間　山田　彝	地区研修リーダー- 田無げやきRC	指田勢郎	38
8. 山田彝さんを知る一人として	クラブ幹事 那覇東RC	安澄文興	41
9. 山田彝様のこと	旧制東京高校学友夫人	田村友枝	43
10. 山田さん・峰先生を思い出して	東京千代田RAC OB	平田幸彦	45
11. 峰先生と私達RACとの出会い	東京千代田RAC OB	甲斐志権	50
12. 峰先生を偲んで	東京千代田RAC OB	武山玲子	52

## 第2部 (クラブ内編・順不同・敬称略)

1. 山田・峰会員	1968. 6.17	チャーターメンバー	権田良彦	55
2. 彝さんのこと	1968. 6.17	チャーターメンバー	今中祝雄	57
3. 偲ぶ草	1968. 6.17	チャーターメンバー	阿部敬二	59
4. 故・山田彝会員、峰英二会員回想	1968.10.28	入会会員	有山房雄	62
5. 山田 彝大人を偲ぶ	1969. 3.10	入会会員	新庄勝助	64
6. 山田 彝君のこと	1970. 1. 2	入会会員	網野 誠	66
7. 山田彝さんと峰英二さんの思い出	1970.10.15	入会会員	新村重晴	69
8. 奉仕に散った先達を偲んで	1970.10.15	入会会員	久木野利光	71
9. ツネさんを偲ぶ	1971. 5.12	入会会員	中分 亨	74
10. 故山田・峰両会員に捧げる	1972. 3. 6	入会会員	山下寛一郎	78
11. 彝先生との出会い	1972. 4.17	入会会員	齋藤純生	79
12. ツネさん、峰先生と私	1973. 1.18	入会会員	藤井吉兵衛	82
13. 亡き友のおもかげしのぶ花ふぶき	1973. 2.24	入会会員	垣見尚二郎	96
14. 会者定離 山田彝さん追想の記	1974. 2.25	入会会員	鈴木清二	97
15. ツネさんとミネさん	1975. 5.10	入会会員	渡邊貞治	100
16. 山田・峰両先輩の思い出	1975.10.20	入会会員	遠矢洋二	102
17. 拜啓 山田彝様・峰英二様	1978. 1.30	入会会員	中川 淳	104
18. 山田兄・峰兄再謹表示哀悼	1981.10.12	入会会員	早川健一	107
19. 山田・峰両兄 追悼	1982.11. 8	入会会員	園田和朗	108
20. 山田ツネさんの思い出	1984. 1. 9	入会会員	黒沢亮平	110
21. ポリオ・プラスで思う事	1986.12.15	入会会員	飯嶋庸夫	112
22. 素晴らしきお二方を偲んで		事務局員	鶴田和子	114
23. 思い出の中から		エレクトーン奏者	志村千陽	117

## 山田 彝・峰 英二両会員 想い出集出版について

1993～1994年度

東京麴町RC会長 渡邊 貞 治  
東京麴町RC社会奉仕委員長 中 川 淳

不歸の客となられた山田・峰両氏に先ずは謹んで哀悼の意を捧げます。両氏はロータリーポリオプラスのため身を挺してご尽力され、また度重なるインド訪問にて活躍されましたが、相次いでご逝去され、ご遺族・知人はもとより我々ロータリアンにとりまして哀毀骨立の念に打たれるしだいです。

当クラブでは、両氏の功績を称え、地域社会に著しく奉仕された団体に山田・峰社会奉仕賞なる顕彰制度を設けております。

しかし、ご両人の蓋棺後早6年を越え、会員の新旧の入れ替わり、また懇意な会員の記憶も忘却の彼方に消えつつある昨今のため、両氏の想い出集出版を計画いたしましたところ、早速多数のご寄稿をいただき、誠にありがとうございました。ここに再度ご両人のご冥福を心よりお祈りいたします。

1994年6月20日





## 山 田 彝 会 員

Tsune "TEDDY" YAMADA

3 / 31, 1924 生

☆国際ビジネスコンサルタント

9 / 17, 1970 入会

6 / 30, 1972 退会

7 / 31, 1972 再入会

7 / 12, 1988 寂

---

**経歴** 東京生まれ、旧制東京高校から東大法学部卒。

日本レミントン・ランド営業部長、住友スリーエム、  
富士ゼロックス社マーケティング・プランニング部長兼海外事業  
部長、東南アジア地域支配人を経て、

43年マーケティング専門のコンサルティング会社 MRDインター  
ナショナルを設立。

1982年国際ロータリー3 Hインドはしか免疫プロジェクトのボラ  
ンティアに選ばれて、南インドで約1ヶ月間奉仕、

RI会長から個人表彰を受賞

〔趣味〕水泳・スキndaイブ・東南アジアの研究







## 峰 英 二 会 員

Hideji M I N E

1 / 13, 1920 生

☆泌尿器科医師

2 / 24, 1973 入会

6 / 9, 1989 寂

---

**経歴** 浅草に生れ、鎌倉で育ち。

旧制成城高校を経て千葉医科大学を卒業。

海軍軍医学校、潜水学校を終了し、潜水艦乗組軍医として勤務。

一時戦死の広報を発令されるもシンガポールにて終戦を迎え、  
捕虜生活3年余。

生還後東京通信病院勤務13年、1959年より九段坂病院に勤務し、  
1980年2月1日定年退職。

非常勤となり、7月1日より熱海温泉病院に勤務。

千葉大学医学部講師、日本泌尿器科学会評議員  
など歴任する。

《趣味》スポーツ・旅行・音楽



## 「山田・峰社会奉仕賞」のしおり

## 山田・峰社会奉仕賞について

国際ロータリーは1986年7月から5年間に亘り地球上からポリオ、ハシカ、ジフテリア、結核、百日咳、破傷風などを撲滅することを願い1億2,000万ドル(約200億円、日本担当分40億円)を目標として募金キャンペーンを実施し、1991年6月募金総額2億1,732万ドルに達し、当初の目標をはるかに超えてこのキャンペーンを終了しました。我が国での募金総額は48億9,856万8,628円に達しました。

この国際ロータリーのキャンペーンは、東京麹町ロータリークラブが我が国の2580地区と同2750地区の各ロータリークラブにポリオの撲滅運動を提唱しこれが国際ロータリーの運動として発展したものです。

東京麹町ロータリークラブの会員であった故山田彝さん、故峰英二さんのお2人は、早くからポリオの惨状に深い関心をよせられ、南インドでポリオに苦しむ子供達の調査を2回に亘り実施され、その状況をつぶさに報告されました。この調査委員会報告が東京麹町ロータリークラブのポリオ撲滅運動提唱の原動力となったものです。

東京麹町ロータリークラブは故山田・峰会員の国際ロータリーポリオ・プラス活動における優れた功績を顕彰し社会奉仕の分野において優れた活動を行い、顕著な業績をあげられた個人、グループ、団体及びロータリークラブ会員を表彰し、これによって社会奉仕活動の充実発展に寄与しようとするものです。

## 山田さんの書簡から

1984～85年度 地区ガバナー

近藤正夫

(東京城北RC会員)

私が、当時、世界社会奉仕の地区委員長山田君よりオフィシャルに受信した3通11枚(A4版)の書簡をここにをお目にかけます。

山田・峰両君の偉大なお仕事、その能力、人間性をこよなく惜しんでいます。

両君と再会の日を楽しみに。 合掌



【第1信】

1985年4月17日

国際ロータリークラブ第258地区  
ガバナー 近藤正夫様

拝啓

いつもお元気でロータリーのためにご活躍、およろこび申し上げます。

南インド・ポリオ免疫プロジェクトにつきましては、私どもは、国際ロータリー第320、321、322、323地区のガバナー、ならびに担当責任者の方たちに、零下20度以下で経口ポリオ・生ワクチンの冷凍保管のワールド・チェーン設備が整っているところでスタートさせるという方針を堅持してまいりましたが、このところ州政府の援助があったようで、マドライに冷凍庫が設置されたので、是非視察にきて欲しいという連絡が第322地区の委員長パストガバナーのスンダラパンディアンさんから連絡がありました。

これで現在までのところ、下記の各地で南インド・ポリオ免疫プロジェクトのために、零下20度以下でワクチンを保管できる冷凍庫が利用できることが委員会報告されています。

第320地区	コチン
第321地区	トリヴァンドラム
第322地区	マドライ
第323地区	セイラム

上記の地区のガバナーの方たち、また担当のPOGの方から、上記各

地の冷凍庫をインスペクトした上で、上記の各地をそれぞれの地区でのモデル地区として選らんで、ポリオの免疫プロジェクトを発足させて欲しいという要請が寄せられております。

つきましては、下記の要領で、当地区より、ロータリアンのボランティアを派遣いたしたいと存じますので、ご許可いただきたくお願い申し上げます。

派遣ロータリアン氏名

峰 英 二

東京麹町 地区世界社会奉仕  
委員会委員

山 田 彝

東京麹町 地区世界社会奉仕  
委員会委員長

派遣地域 インド

派遣の目的 上記各地の冷凍庫のインスペクション免疫プロジェクトの細部の打合せ  
州政府公共保健省スタッフとの打合せ  
ユニセフとのワクチン購入、輸送についての打合せ  
各地でのプロジェクトのPR活動

派遣期間 4月20日発・5月12日着 合計22日

経費支出 第258地区と第275地区とで半分づつ分担  
第275地区の世社委員会・山田委員長より、第275地区



ではボランティアが出せないのです、当地区のボランティアに両地区の代表として奉仕願いたい。

費用は半分ずつ分担するから、という口頭の連絡をもらっています。

報告書の提出 報告書の提出は帰国後1ヶ月以内に提出することにし  
たいと思います。

以上の要領でボランティアを派遣したいと思いますので、何とぞご許可いただけるようお願い申し上げます。

敬具

国際ロータリー第258地区

世界社会奉仕委員会

委員長 山 田 彝

コピー 戸田地区幹事

P.S.

ボランティア派遣要綱では、ボランティアの奉仕の最低期間を出発日ならびに帰国日をふくめて3週間とし、一度ボランティアとして奉仕してきた人たちについては、2週間を認めることができるよう、規定してあります。

今回は、当初は321地区のトリヴァンドラム、323地区のセイラムの2ヶ所のコールドチェーン設備のインスペクションと細部の打合せ、指導を予定して計画を組みましたが、その案内を320地区、322地区に出しましたところ、両地区から冷凍庫の用意ができたので、来て欲しいという要請があって、4地区を廻らなければなりませんので、22日では相当に忙しいスケジュールになることと思います。

コピー 戸田地区幹事

【第2信】

1985年4月19日

国際ロータリー第258地区

ガバナー 近藤正夫様

前略

明日から南インド・ポリオ免疫プロジェクトのために、インドに  
てまいります。

今年は、このプロジェクト募金の最後の年でございますので恐れ入  
りますが、ガバナーから各クラブに協力要請をお願いいたきたいの  
です。目標額は800万円です。

敬具

世界社会奉仕委員会

委員長 山田 彝

【第3信】

1985年4月19日

国際ロータリー第258地区

ガバナー 近藤正夫様

前略

カナダから南インドで独自にポリオの免疫をしたい、という申し入れについて、ロータリー財団の特別助成金の担当者のパトリシア・グレーネヴォルトさんから、同封の書信がきました。

要旨はカナダの638地区は南インドの323地区と協力して、日本の258、275両地区のポリオ免疫プロジェクトのたりない部分を補足することだ、ということです。

これについては、カナダの638地区がどういった計画を持っているのか(これは、私のカナダの638地区ガバナーに出した手紙に書いたとおりです)、教えてもらわない限りこちらとしては、手のうちようがありません。昨年11月にマドラスから2人のロータリアンが来日しました。2人とも323地区の委員会の委員長もつとめているロータリアンで、私とは旧知の間柄です。第275地区の世界社会奉仕委員長の山田さんと2人で会ったところ、2人から「第323地区はマドラスでポリオのプロジェクトをスタートさせることに決定した。ガバナーのプルショータマンさんも了承している」と言います。「しかし、マドラスではワクチンを保管する冷凍庫がないのに、どうするつもりか？」ときくと、「購入するつもりです」と言います。

こちらとしては、ガバナーのプルショータマンさんから連絡がないの

で、おかしいと思って、そのままにしておきました。その後ブルジョータマンさんから、第323地区はセイラムでプロジェクトをスタートさせるという通知がありました。

その間、321地区の医師のロータリアンに依頼しておいた、マドラスの旧型冷凍庫の利用についてのチェックの返事がきて、旧型冷凍庫もポリオのプロジェクトには利用できない、ということが判っています。

こうしたことは発展途上国に対する援助では、よく起こることで、2人のマドラスのロータリアンは、それなりに自分たちで、そう思っているわけで、故意に眞実とはちがうことを言ったのではなく、自分たちの希望的観測を眞実として言ったということです。

現在、特に323地区では、こうしたプロジェクトを、ホーム・タウンに持ってくる、あるいは自分のおかげでこういうことができるようになった、と利用したい人たちが出てきているようです。

私どもは、プロジェクトが、こうしたことに利用されないよう、ワールド・チェーンの施設のあるところから、スタートさせるという方針で進めてきて、現地の人たちの競争には巻き込まれないようにしています。これはポリオ2005年の委員長のシーバー博士からも、完全に同意するという手紙をいただいております。

さて、財団のグレーネヴォルトさんに対する返事ですが、これはやはりカナダの638地区のプランを知らなければ、何とも言えないと思います。

基本方針についての合意がなく、同一地区のなかで、ポリオの免疫を実施するという事になると、混乱が生じます。

それに現在のところ急務はポリオの免疫についての知識の普及のための教育、モデル地域におけるパターンの設定です。

こういうことをしなければ、現在のように、3バース以上のワクチンを飲ませた子供がポリオで死亡するというような、コールド・チェーン不備による効力を失ったワクチンの投与を防ぐことはできません。

簡単にカナダの計画を知らせて欲しいとあってあるので、それを見てからでなければ、無条件でというわけにはいかない、と手紙を出しておこうと思いますが、いかがいたしましょうか？

敬具

世界社会奉仕委員会

委員長 山田 彝

コピー 戸田地区幹事

# 山田さんを思う

1992～93年度 地区ガバナー

松島寛容

(那覇西RC会員)



昭和62年3月13日(1987年)

山田彝さんと(於・ニューオータニ) ロータリー年次大会

山田さんとは、上田正夫ガバナー年度(1983-84)にお目にかかったと思う。

山田さんは地区世界社会奉仕委員長(WCS)で、私は沖縄分区代理であった。

山田さんは非常に温かく、とにかく面白い、談論風発である。そのうちにおじいさん、おばあさんが沖縄の廃藩置県（琉球王国→明治5年琉球藩→明治12年 沖縄県）の時に、当時の明治政府大久保利通内務卿が松田道行之内務大丞を沖縄に派遣しているが、その随員として沖縄に渡り首里に居を構えていた事があるという興味深い話になった。

それは1879年前後の話である。

今と違う樹林鬱蒼としていたであろう、古都首里の情緒を満喫されたであろう沖縄の古き良き時代の事である。

おばあさんは良くこの事を山田さんに話をされていて、沖縄に関する文献も数多く残っていたとの事であった。

それからお互いに、更に親しみを深める様になったのではないと思う。

そうこうして一度沖縄に来てくれという事になり、服部謙太郎ガバナー年度後半、1986年3月24日(月)より4月1日(土)迄の一週間お招きをして、那覇・那覇西・那覇東・浦添クラブでポリオの卓話をして貰ったが大きな反響を呼んで、那覇東の伊藤悦夫琉球大学医学部教授からは是非その話を学生に聞かしたいとの要請があり、とうとう大学へ出掛るというグッドハプニングもあった。

そのあとだれか南インドへ行って欲しいという話になって那覇西クラブ大仲 良一(沖縄セントラル病院院長)と大宜見 斉(92-93年地区幹事)のお二人が白石雄二ガバナー年度、1988年1月から約1ヶ月間ポリオ投与実施状況とコールドチェン実態調査の為、渡印している。

その他に那覇東・安澄文興琉球大学医学部教授も同行を希望しておられたが、大学の日程の都合で断念されている。



当時の白石ガバナーと阿部孝地区幹事がその前後、この事を大変心配しておられた様に思う。大仲、大宜見両氏共その後も至極健康であるので問題はないが、印度の風土病についての懸念であったのではないだろうか。ひょっとしてその年度クラブ会長であった山田さんと峰先生の健康上に問題が生じていたのではないだろうか。

そうであれば非常に残念な事であったと思う。

大仲、大宜見両氏渡印以来、彼の地のウランバートルロータリークラブとの交友は繋がっている。小児麻痺で車椅子のチャンドラー青年が大仲さんの病院で半年間治療(無料)を受け、自分の脚で歩いて故国へ帰っていった。

天にも昇る様な気持であったと思う。

ウランバートルクラブは大仲氏を記念すべく「大仲ファンド」という奨学制度を造り、医学を志す学生の支援に乗り出し、那覇西クラブも協賛をして交友は続いている。これも山田さんの足跡の一つである。

山田さんが帰京する日は土曜日でゴルフを楽しむ事にした。山田さんはキャリアーは長いが、長いことやってないよという事で、盛んに空振りを繰り返し乍らほほ笑ましい思い出も残して逝った。

これからも末長く色々と啓発して下さったであろう方を失った哀しみは大きい。

峰先生とは挨拶を交す程度であったが、両氏の足跡は余りにも大きい。お二人なくしてロータリーのポリオプラスは語れない。

只管にご冥福をお祈りするばかりである。

—完—

# ツネさんのこと

1984～85年度 地区幹事

戸田 一 誠

(東京練馬西RC会員)

私が初めて「ツネさん」を見掛けたのは、随分前、中央区分IGFで彼が麹町クラブの世界社会奉仕委員として登壇し、「ポリオワクチンを南インドに贈るプロジェクト」について話した時である。

早口で要領を得ない喋り方をする人、というのが当時の印象であったが、それは才気が走って全てを一緒くたにして話そうとする為だ、ということが後からわかった。

後年地区幹事を引き受けることになって、当時ガバナー事務所に山積していた「ツネさん」のレポートを整理し、R財団からの金の流れをわかりやすくする作業を手掛けたことから私達は急速に接近した。大金の集まる場所はいつでも掃除をしておく必要があり、彼はどちらかといえは掃除が下手だったのである。

麹町クラブのWCSプロジェクトが、RIの「ポリオプラス」プロジェクトに発展した経緯は多くの人々の知るところである。まさしく彼はキーパーソンであった。

私事で恐縮だが、私もかつて、仏陀成道の聖地ブダガヤに幼稚園を建設する仕事に従事したことがあり、その当時は一年の中、何週間も北インドの田舎に滞在して現地の建築業者との打合せや作業の監視役を経験したことがあって、その経験は「ツネさん」の説明の全てを注釈無しに

聞くことが出来る下地となっていた。そのことが二人をより近づける原因ともなり、又、彼が不本意乍ら受けていた多少の誤解を晴らすのに役立つと思う。

インドの現地の事情というものは、インドの外にいて西欧化した一般常識を以って想像することを許さないことが多い。

私はある種の虚しさから、そのインドの仕事の一線を疾うに退いて、インドについて多少屈折した思いでいたのに、イイ年した彼は真剣になって「ポリオプラスプロジェクト」に取り組んでいる。一体コイツは何者だ。

彼は時々「きだみのる」のことや「三好京三」の事等を語ってくれたが、残念乍らよく憶えていない。

或る時、新宿のハイアットリージェンシーで地区の会合があった時、「ツネさん、時々気になる咳をするネ」というと、「ウン、原因が良くわからない。インドの砂塵か、或いは寄生虫かもしれないナ。但し、肺ガンじゃないんだ」と強調していたのが記憶に残っている。

私が、インドの写真集の出版に関った時、「イイモノがある」と言って、アンコールワットを丹念に撮影したロールのカラーポジフィルムを大量に貸してくれた。インドシナがまだ穏やかだった頃の、ご家族の日常も含めた貴重なフィルムであった。

暫くそのままになっていた或る日、奥様から電話があり、フィルムを返して欲しいというお申越しで、迂闊にしていた私は、長い間大事なフィルムを借り放しにして何の反応も起こさなかった事を恥じ、非礼のお詫びを申し上げると共に、その電話で奥様から「ツネさん」の具合があまり良くないということを伺ったのである。

今思えば全て間が悪かった。いずれ退院したら等と考えている中に訃報が届き、葬儀の折も出張と重なり最後のお別れも出来なかった。

「ツネさん」随分むつかしい字の名前だね

「ツネさん」僕はあなたと出会えて良かったよ。一方的にトクした。

「ツネさん」咳き込み乍ら頑張ったポリオプラスプロジェクトは多勢の人を巻き込んでとてつもない輪に広がったネ。

「ツネさん」本当にありがとう。

あなたと近づきになれたことを感謝しつつ。 合掌

## 南インドに陽がさして

1992～1993年度 地区幹事

大宜見 齋

(那覇西RC会員)

「君に合ってもらいたい人がいるのだが……。」パスト・ガバナー松島寛容(1992～1993)さんから紹介されたのが山田彝さんとの最初の出会いだった。当時275地区ガバナーの渡辺和美さんが日本ポリオ・プラス委員会の委員長に指命され、山田さんがポリオ・プラス・インターナショナル・コーディネーターとなったことは知っていた。その山田さんが沖縄を訪れたのである。ともあれロータリーの真剣な話は沖縄では習慣上夜である。また夜のほうが話はまとまる。

「お酒は飲めますか?」「好きですよ」

それでは決まると山田さんの歓迎会として、馴染みの料亭で那覇西RCの有志の面々にお出まし願って会を開いた。松島さんはかねてから昵壟の間柄であるので話が弾んでいた。思えば山田さんは南インドのボランティア活動から帰ってきたばかりで、お疲れの様子もなく元気そうにみえた。病気という気配は全然感じられなかった。むしろ色白の肌が泡盛の味に紅色になって希望に満ちあふれる状況にあった。著名な人類学者の父の血を引いておられるだけあって、アジア周辺の文化、言語、習慣、地理についてはめっぽう明るい。インドの話になると目を輝かして話がとぎれない。ラオスの言葉と沖縄の方言の言葉の発音がよく似ている。したがって沖縄の起源は南方説が有力だろう。首里城城下の弁財天堂の絵文字はインドのマンドラ教の絵文字と合致している。かなり古

い時代からインドとは交流があったのではないか、話ははずんだ。

実は山田さんは今回沖縄を訪問した目的を、何時話そうかと考えていたのである。それはポリオ・プラス・プロジェクトに対する沖縄サイドの協力推進方の依頼であった。松島さんにご協力について即座に快諾した。しかし山田さんにはもう一つ協力願いがあった。それが重要だったのである。それは南インドにおける山田さんと峰先生が活動してきたボランティア活動と同一の性格のチームをインドに、沖縄サイドから派遣してほしいということであった。それには松島さんも即答は出来なかった。

インド、得体の知れない広汎な国に、私も少々の知識がない訳ではない。沖縄とインドと亜熱帯農業分野では似ている所が多い。したがって農業問題で交流した人々が帰ってきたばかりで、二度と訪問したくない国だと聞かされていた。しかも南インド全体が共産主義体制で占められている。ロータリアンといえども一労働階級にしか外ならない。人道的論理が通用するかどうかも疑問である。いずれにせよ山田さんが「友」の中で南インドのポリオの現況報告をした。蚊一匹を殺してはいけない。食事は菜食でしかも便所にトイレットペーパーはなく指で仕上げるといふ全てに悲観的な発表である。何一つとっても「OK」というわけにはいかない。後でわかったのだが松島さんが「会ってほしい人」という意味が理解できた。何とか山田さんの熱意を汲んで沖縄サイドでの南インドにおけるボランティア別動隊をまとめてくれという考えなのである。

「コーディネーターとしての山田さんのテリトリーは韓国、台湾、香港、ではなかったのですか。しかも南インドへはカナダ地区から支援を送っていると思うが……。」尋ねますと、実は麴町RC15周年記念事業としてポリオ・ワクチンを贈ったことに始まるという。そして向こう

2ヶ年間に免疫接種行動隊を2パーティー、南インドに派遣することを約束してあるというのである。またこれは258地区と275地区とのポリオプロジェクト共同事業で、その第1波として山田・峰先生のパーティーが終えてきたという。私は正直いって山田さんに会わなければ良かったと思った。

しかしその夜の酒は旨かった。同じロータリー問答でも、アクティブな論議は時を忘れる。山田さんの熱弁はまだ続いていた。私も何となく山田さんの顔を見てもこの人には断りきれないのではないかという予感が走った。少々酒にも毒されていたのか考えてみようという気にもなっていた。この年で3週間も南インドを駆け巡ってきている。敬意を表さなくてはいけない。いずれ誰かがやらねばならないとすれば早めにお引受けしようという気分が変わりつつあった。白髪のスペシャリスト山田彝さんとの出会いはこのようないわくつきの出会いだったのです。「考えてみましょう」と申しあげてその夜は別れました。しばらく放っておくと諦めてくれるのではないかと安易な気持でいたのが間違いで、翌日から電話で決心をせまられた。

「わかりました、お引受けいたします」

この時、私は山田さんの熱意に負けてお引受けしたものの、どのようにチームを編成したらよいか全く無の状態であったのである。その後東京と沖縄とで、お互いに連絡をとりながら、山田さんとの約束を果たすため、東奔西走の毎日である。山田さんとは1チームを編成するということでしたが、ご協力するのであれば2チームを編成し、南インドでの活動も或る程度余裕をもつ意味から滞在期間も6週間とする計画で作業を進めた。

この頃から山田さんと連絡がとりにくくなってきた。ご兩人とも不治

の病がかなり進行していたことに私は全然気づいていなかった。チームを編成するにあたって困ったことがおきた。ポリオ(急性灰白脊髄炎)、これは先進国、発展途上国、後進国にも共通にあり得る病気で比較的若いロータリアンの医師でも処置できる。しかしプラスという病気はハシカ、ジフテリア、破傷風、百日咳、結核で昭和16年生以前の医師でなければ処置できない。これらの病気は先進国では、もうないのである。したがって医師が限定される。那覇西RC大仲良一先生の協力を得て、山田さんの要望通りのチームが出来た。その旨山田さんに連絡したら「ありがとう」といって喜んでくれた。それが山田さんと私の最後の交信となってしまった。

1987年6月、白石ガバナーノミニエ、阿部次期幹事、木本茂三郎カウンセラー、塩月賢太郎次期WCS委員長を招集しポリオ・プラス・プロジェクトに対するコーディネーターとしての仕事を遂行、南インド・ポリオ・プラス免疫接種並びに実態調査チームを沖縄分区那覇西RCから実行することを報告し、全てのポリオ・プログラムに参画することが困難になったのである。病気が悪い方向に進行していたのである。ポリオに関する関係者も山田さん、峰先生の状況は知っておられた。山田さんの意向は塩月賢太郎次期WCS委員長によって引継がれた。我々の南インドへの出発の期日が近づいてくる。特に山田さんは記録として残し、

- 1) 南インドにおけるポリオの接種状況
- 2) コールド・チェーンの実態調査
- 3) 公的病院のポリオ・キャンペーンへの参画指導

これら3項目を重点的に調査、実施してほしいとのこと。出発を間近に控えて白石ガバナーから念を押された。大変だろうと思うが南インドへ行くのは中止してもよいのだよといわれた。山田さん、峰先生のことが



あるから一番心配して下さったのは当時の白石ガバナーであった。しかし私は「ご心配なく、このことは山田さんと私の約束ですから」と云ってこちらからお願い申しあげた。出発の前日、山田さんと連絡をつけたかったのですがだめでした。

1988年1月～1988年2月までの約6週間、南インドに出発した。山田さん、峰先生の偉大な足跡を訪ねて南インド320地区、321地区、322地区を訪問、特にこの三地区はご両人がハードに活動した地区で、よく皆さん知っておられた。

「ツネ」「ミネ」は元気でやっているか。二人はこの南インドに光を与えてくれた。必ずもう一度ここに来るといったが来れないのか。冷蔵庫にワクチンを保管していたら砂糖水になるではないか。港の冷凍庫に入れ替えなさいと俺をしかりよった。頑固な二人はどうしている。

大勢のロータリアンが山田さん、峰先生の勇気ある行動を称賛してくれた。嬉しかった。

この偉大なるポリオ撲滅運動、天然痘がこの地球中からなくなるまでは200年(1770～1970)も経過した。R Iはポリオを2005年までの20年で撲滅するという。1991年ポリオ・プラス・キャンペーンは成功裡に終結した。このことを待たずして吾々は山田彝さん、峰英二先生お二人の尊い命を失ってしまった。

しかし南インド第2波の交流によって、山田さんの懸案事項であったP.S.G医科大学(ケララ州ウランバートル)に1989年大仲基金(那覇西)が創設され、毎年20名～30名の医大生に奨学金の恩恵を与えている。P.G松島(1992～1993)年度には中国に対し、R Iポリオ基金とは別に日本独自の基金を集め8000万相当のワクチンを贈った。麴町RC15周年

記念事業という種を遠くに蒔いた。それが花となって開いたのである。  
そしてクラブに山田・峰社会奉仕賞というものが新しく創設された。

2005年は、あっという間にくるでしょう。その時もう一度、山田さん・  
峰先生を思い出して下さい。2005年エスラー・デニング卿を偲び、贈っ  
たイギリスへの桜木が満開するのではないのでしょうか。

ご二人の功績を記念して小冊子を発行するにあたり、麴町RC皆様の  
益々のご繁栄と今後のご活躍をご期待申し上げます。

平成6年3月末日

## ツネさんの思い出

元日本ポリオプラス委員会委員長代行

松 阪 麻樹生

(東京南ロータリークラブ会員)

山田ツネさんとの出会いは今から35年も前になる。J C (青年会議所) 世界大会が東京で開かれた時、渉外委員会のデスクで流暢な英語やフランス語で外人会員と談笑しているツネさんの姿に目を見張った時以来である。

次の出会いは彼がゼロックスのマネージャーになった時である。彼は日本では数少ない「プロのマネージャー」を目指していた。彼はその力量を買われてタイ・ゼロックスの支配人に就任して敏腕を振るった。帰国後日本AM(アドレソグラフ・マルティグラフ)社の社長に就任した。ホテルオークラで開かれた社長就任披露パーティーでの彼のスピーチは、今でも僕の目にハッキリと焼き付いている。それほど強烈で、自信に溢れたものであった。部下の外人幹部をつぎつぎに壇に呼びあげて紹介していった彼の姿。彼の情熱そのままの姿であった。

数年たったある日、彼ら電話があり、当時彼が熱心に活動していたメーソンの例会に僕を連れていき、盛んに入会を勧める。すでに昭和41年からロータリアンになっていた僕はそれを断り、逆に彼にロータリーに入ることを熱心に勧めた。数ヶ月後、彼は麹町クラブに入る。

また数年が過ぎ、今度の出会いはグアムであった。彼は持ち前の実行力で日本の少年数十名を引率して毎年グアムを訪問し、親善水泳大会を催していた。僕は故渡辺ガバナーの公式訪問のお伴で行っていたので偶然の出会いとなったのである。

その後世界ロータリーはポリオプラス運動を展開することになりR Iはアジアの総責任者に故松平一郎パーストガバナーを、日本の責任者には故渡辺和美パーストガバナーを指名してきた。松平さんの下でロータリーの友全国常任委員を4年勤め、渡辺ガバナーの下で地区国際奉仕委員長を勤めた縁で、コーディネーター就任の委嘱を打診されたとき、僕は躊躇無くツネさんをインターナショナル・コーディネーターに推薦し、自分は日本コーディネーターの役を引き受けた。それより前、ツネさんはすでに麹町ロータリークラブのみなさんと南インドのポリオ・ワクチン接種活動に身を投じていた。すなわち、彼はポリオプラス運動の先駆けを果していたのである。その彼の慧眼と実行力に我々は脱帽した。

しかしそのインド僻地での生活中に彼はなんらかの病気を拾ったのではないだろうか。その後マニラで発病したと聞いた。帰国後も健康がすぐれなかったようであり、ついに帰らぬ人となった。彼の葬儀には静かな中に、彼の偉業を偲ぶ多くのロータリアンが集まった。しかしそこには渡辺委員長の顔もなかった。彼もその少し前に不帰の客になっていたのである。二人のその献身的活動に皆の感謝の心は集中した。

スバラシイ情熱と実行力の人「ツネさん」  
どうぞ安らかにお眠りください。

## テディーの思い出

Fred ESTABROOK  
(TUMON BAY RC会員)



ツネさんが毎年日本の多くの青年を連れて Guam を訪問し、水泳競泳を通して国際親善の実をあげていたことはご承知と思いますが、当時からその行事の Guam 側の中心になっていた

MR. FRED ESTABROOK (TUMON BAY RC)  
に書いてもらいました。

松阪 記

# Rotary Club of Tumon Bay

P.O. BOX 7929 • TAMUNING, GUAM USA 96931

*These thoughts were put together by three Rotarians who knew and loved TEDDY YAMADA for what he was, "A GREAT ROTARIAN".*

*Rotarian Pat Sagisi first met Teddy in the late 70s at a Rotary District Conference in Japan. His analysis was, here is a rare individual, a true Rotarian, one who is sincere in both words and action. These thoughts made for a lasting relationship between these two rotarians.*

*Past President John Dierking calls Teddy a beloved friend of the people of Guam, one who lived the Rotary motto "Service Above Self".*

*Past President Fred Estabrook remembers Teddy because of his organizational skills of the successful swim meets put together by Guam Rotary Clubs and the Rotary Clubs of Japan.*

*Over the years, this leadership by Teddy not only made for successful swim meets but for international relationships that very few persons could have had the skill to bond together our two cultures.*

*The Rotary District Governors, with the assistance of Teddy, were very instrumental in building this relation that has brought young Japanese swimmers in close contact with Guam families. Many of these contacts have lasted for many years. Some of the swimmers have selected University of Guam for their university education.*

*The Rotary Club of Tumon Bay provided the funds for the swim meets by raising monies operating a refreshment stand and a souvenir gift shop on the site of the meet.*

*The real beauty of this man's personality was the manner in which he brought these swimmers together. Most of the Japanese swimmers stayed with local Guam homes during their stay on Guam. They learned the customs of the family life in an American style community. Teddy Yamada often said he looked forward to staying with Rotarian Pat Sagisi when he visited Guam because of Rotarian Pat's son Patrick who was one of Guam's greatest swimmers at the time.*

# Rotary Club of Tumon Bay

P.O. BOX 7929 • TAMUNING, GUAM USA 96931

-2-

*Needless to say, hundreds of swimmers, coaches, and parents from Japan and Guam, through the years, were involved and are still involved in this magnificent program, thanks to the efforts started by Teddy Yamada, promoting international understanding and good will between Japan and Guam. WE ALL MISS HIM!*

*The enclosed picture is of the signing of the sister club relationship, NAS Tokyo Japan and the Manukai Swim Club of Guam.*

# 人 間 山 田 彝

地区研修リーダー

指 田 勢 郎

(田無けやきRC会員)

山田さんは、ロータリアンとして私の人生に大きな影響を与えた一人であった。そして今もなおその影は長く尾を引いている。

フィリピンの上水施設を対象とした我々武蔵野分区が実行していた世界社会奉仕活動に際し、日本側の窓口を分区から当時任されていた私は、色々な問題を抱えて悩んでいた。その理由はフィリピン側だけでなく、むしろ日本側の意見不統一や、単年制度へのこだわり、冷淡さに抵抗を感じていた。

そんな時の年次大会で、山田さんの南インド、タミールナド州での子供のポリオ患者の悲惨な現状と、それを助けたいとする人間としての自然な感情をロータリアンとして考え、地区として行動しようと言う話を聞いた。

決して主張を強要しようとしめない紳士的なロータリアンらしい態度の中に潜む人間愛を感じ、人間の大きさに感動した。分区の中の小さなものでなく、出来得れば地区内を巻き込み行動しようとする意志に驚嘆し、私の活動への強い精神的サポートを感じ、氏の主張に同感の意を手紙にし、クラブでの卓話を依頼した。それを快く受けてインドの現状とポリオに対する認識をより深めることが出来、この時から山田氏との交流が始まった。



その後、地区世界社会奉仕委員に推された私は地区としての活動の限界と現在の日本のRCにWCSの意識の強調が如何に必要なかを知った。この期、委員長の山田さん、峰さんのお二人は再び南インドを訪問された。

次年、峰先生が地区委員長に任ぜられ、山田さんは彼が口火を切ったと言える全世界的ロータリー活動のポリオプラス・プロジェクト・アジア・ゾーン・コーディネーターとなり、活躍が約束されたに見えたが突然、その志なかばにして急逝され、心のリーダーを失った私のみならず、ロータリーのWCS活動も大きな痛手を被った。

峰先生は山田さんのフォローを進められ、その後を東京クラブの塩月賢太郎先生が後任として継承されたが、峰先生も共に突然の病で急逝された。お二人の急逝でインドとの糸がプツリと切れたようで不安が残ったが、山田、峰時代からの残務の整理と地区としての委員会活動は如何にあるべきかの根本的な問題検討もあったが、両氏の遺志として何とかやり遂げねばならぬ義務を感じていた。

塩月氏より副委員長の依頼を受け、協力していたこの時期、地区委員、沖縄那覇西クラブ大宜見さんと同クラブ大仲先生のお二人が南インド、タミールナド、ケララの両州を地区活動として1ヶ月余にわたって訪問され、ポリオ・ワクチンに対する現状の確認を実行、この地区でのワールド・チェーンとその付帯設備の充実こそ、南インドでのポリオプラスの成功の鍵と報告した。二人はユニセフのインド支局をも訪問し、強力冷凍庫と停電に対する発電施設拡充への協力を依頼し帰国した。

(当時-30°C以下の冷凍庫は南インドに存在せず、ポリオワクチンは保存不能であった)

大宜見、大仲両氏の持ち帰った資料から、次期に地区委員長となった私は、マドラス市外の過去に知己のあったメンバーの医師名を発見し、その筋から地区ガバナーに接触、現状を調査、ユニセフからの冷凍庫の配布はあったが、その管理の為に-30°C測定可能な温度計及びスポット温度計の不足を知り、これに対応、山田さんの後任となられた松阪コーディネーターのお世話で、水銀寒暖計300本、デジタル・スポット温度計40個を発送し、ワクチン管理に万全を得たとの報告をインドから受けた。その後の南インドにおけるポリオ・プラスの成果は皆の知る所である。

山田・峰両氏の遺志はかくしてポリオ・プラス・プロジェクトとワールド・チェーンの充実として果たされたと言える。その後、私の後に大宜見氏が地区委員長となられ、幅広い活動をなさったが、このように2580地区の中にも両氏の撒いた種子は実を結び得た。

今般、麹町クラブの中に山田・峰両氏の偉業を顕彰しようとの話ありと渡辺会長からお聞きし、尊敬する両氏の私の知る一面と、両氏に始まった地区世界社会奉仕委員会の流れを、拙文ながら両氏を偲び一文させて頂いた。

## 山田 彝さんを知る一人として

琉球大学医学部教授 解剖学

安 澄 文 興

(那覇東RC)

記憶に自信がなくなった年代となって、正確な記述に不安を抱きながら、一文を寄稿させていただきます。

ロータリークラブに入会して1年未満の時に、松島パストガバナーのお誘いで、ロータリーの紹介者で、大学での同僚でもある病理学の伊藤悦男教授に連れられて、料亭で昼食をご一緒したのが、山田さんとの初対面でありました。この日と翌日との二日間が全てであったのです。

山田さんとお話した中で、強く印象に残っているのが、山田さんの豊かな国際性と、鯛の刺身で、後者から先ず書くことにします。

山田さんは各地を旅行されて食通でもあったのでしょうか。昼食に出た鯛の刺身が話題となりました。「鯛の刺身は大阪で食べるのが最高」、「鯛のメめ方に違いがある」とおっしゃったのです。

私は大阪生まれの大阪育ちで、成人してから沖縄にくるまでに、金沢、千葉、宮崎、福岡と移動し、旅行好きでもあったものですから、日本国内を相当動いておりました。どの地を訪れても、鯛の刺身は大阪で食べる方が、色といい、歯応えといい、より美味しいと思っていましたので、関東出身の山田さんの弁は正に我が意を得たりだったのです。この件は今でも正しいと頑張っておりますが、先でもう一度、山田さんと意気投合するのを楽しみにしています。

ロータリーに入って間もない私にとって、山田さんのポリオプラスの取り組みのきっかけと言えるインドでのお話は、国際性に富むまったく素晴らしいものでした。インドへは元々結核の件でR Iから依頼されて行かれたとのこと。インドの地方都市なのでしょうが、街中のそこそこに、歩行も困難な年端もいかぬ子供達が這ずっているのを見て、「本当にショックだったし、何と言ってよいか、正に衝撃だった」とおっしゃっていた。結核どころでないポリオの撲滅を訴えられ、その後の色々な問題を一つ一つ解決されて行かれた実行力と指導力には、目を見張るものがありますが、R Iやインドの行政機関を相手にして、国際人の山田さんだったから成し得たことでした。ポリオワクチンの投与に当たり、コールドチェーンの態勢整備、投与についての教育に関してもお聞きして、私はこのような生き生きとした使命感あふれるお話を、是非、医師を目指している私共の学生に聞かせたいと思いました。翌日の午後に担当する時間があり、山田さんにお問い合わせしたら、快諾され、ほぼ1時間の特別講義が実現しました。

山田さんの御講義を拝聴したのは琉球大学医学科の4期生(昭和59年入学)で、彼等もすでに医師になっております。あの時、私は山田さんのお話を私の学生に是非聴かせてやりたい!!、聴くべき内容だ!!と確信してやって頂きました。山田さんと国際性と奉仕の心がインプットされた彼等の中の誰かが、きっとリーダーシップを持って、世界で活躍してくれるものと信じています。

最後に、山田さんがおっしゃった言葉で忘れられないものがあります。

「今は未だ Platform に立ったばかりです」

## 山田 彝 様 の こ と

旧制東京高校学友夫人

田 村 友 枝

新庄様から、山田彝様のお話をうかがったのは、大分以前の事でした。愚息が、日枝神社のボーイスカウトに入団しておりますが、団委員長のお役を務めていられるのが新庄様で、私は新庄様を通じて山田様がロータリアンである事を知りました。

山田様と亡夫とは、東京高校時代の学友で文乙で御一緒の方でありました。亡夫は生前

「この字は何と読む？ 彝」

むずかしい字を書きまして私に見せたのを覚えております。

「さて、何んと読むのかしら」「つねと読むんだよ」

「へえー、つねさん。可哀想にこんなむずかしい字をつけられて、小学校の時はさぞかし書きづらかったでしょうにね」

「つねは、きだみのるのせがれか」

「へえー、だから何か意味があっておつけになったのね」

つねという字を通して、山田様が日本人ばなれをしている芒洋とした方で、日本には余り住んでいなくて、今何処に行っているか解らない方である事も知りました。東高時代の学友の方々は、毎年、同期会を開いてお集まりが続いている様ですが、赤坂見附の一隅で「カギ屋」を開いている亡夫も又、変わった方の一人でした。

お住まいが辨慶橋を渡って、上智大学の裏手の通りに面した所にあり

ましたので、赤坂見附方面にご用の折には、突然姿を表し、

「おい、田村、元気か」「おー、ツネ」

昔に返って乱暴な言葉を二言、三言言い交してさっと立ち去る事もありました。

或る夏の夜、突然表れ

「おい、田村」「おー、つね、何処へ行くんだい、縁日か」

「あー、一つ木通りの六地藏の縁日か」「まあ、行ってこいよ」

「それじゃー又な」

と離れて待っているお子様を連れて一つ木通りの方面へ曲がって行かれました。山田様も、「御縁日」なんてやっぱり日本人なんだなあと、お父様らしいお姿をお見かけしたのは、それが最後でございました。

つかみどころのない様な風貌、御性格、日本人には稀有な存在であられた山田様も、たくさんの御功績を残され鬼籍に入られた事は、かえすがえすも惜しい気が致します。

今頃は、昔に返って「オイ、田村」「オイ、ツネ」で楽しく語っている事ではございません。

# 峰先生を思い出して

東京千代田RAC

OB 平田 幸彦

会員資格の中に、18才から28才までと云う年齢制限があるローターアクトにとって、例会その他の活動の場で、ロータリアンの皆様方と接する機会を持てることが、自分自身を成長させる意味で、非常に大きな力となりました。社会経験も十分でない若者達が、各々の人生を切り開いて行くため、壁にぶつかり、悩み、試行錯誤を繰り返す時期が、ローターアクト年齢だと思います。私にとっても、クラブの運営を通して様々な経験を積み、広く社会を見すえる勉強ができて、現在の私自身を考えるにあたって、大変貴重な年月であったと思います。

多くの魅力あるロータリアンの方々より、たくさんの御指導を頂きましたが、峰先生からお受けしたローターアクトへの愛情と情熱は、私達にとって比類なく大きなものでした。

先生は、いつも私達の中へはいつか来て、共に喜び、共に悩んで下さいました。先生から見ると簡単でつまらないことでも、私達自身で解決できるまで、一緒の早さで歩いて下さいました。

他地区や他クラブとの交流会などでよく「僕は最年長のローターアクトだ。」と自らを紹介しておられましたが、最年長の会員でありながら、現役の誰よりもローターアクトソングにある「若さ燃ゆるよ」に当てはまる方でした。私が29才になってローターアクトの定年になったときも、「僕が一生懸命やっているのだから、OB達も手を貸せ」とよく発破を

かけられました。

お忙しい御予定の中で、252地区との交流も非常に応援して下さいまして、何度も仙台、水沢、気仙沼まで同行して下さい、他地区まで先生のファンができてしまった位です。

先生の若さと行動力を思い出すエピソードとして、何と云ってもアイスホッケーがありました。例会にお見えになられたとき、大きなバックを肩から担いでこられたので、何の荷物かとお尋ねしたところ、アイスホッケーのOB対抗戦があるとのことで、午後9時の例会が終了後、重いバックを担いで、何度も後樂園へ向われました。あのバックを担いで振り返りながら手を振られた先生の姿は、私達に何よりのパワーを与えて下さいました。アイスホッケーではありません。サッカーのOB対抗戦の話も、何度かして下さいましたものです。

又、峰先生といえば、お酒がお好きだったことが思い出されます。新年会、クリスマス会は云うに及ばず、他地区との交流会や色々な行事の二次会は、先生の「おい、行くぞ！」の一声で腰が上がりました。銀座、赤坂、六本木、新宿と私達を飲み連れに連れて行って下さいましたが、どこへ行っても行きつけのお店があるのには、驚かされたものです。陽気な楽しいお酒で、飲みながら色々なお話を下さる中で、私達にとって参考になる話がたくさんありました。先生がお酒を飲まれたときに歌って下さった数々の歌も例会などのソングリーダーとして、タクトを振られていた姿と一緒に、懐かしく思い出されます。

先生と何年も御一緒させて頂いて、先生が他の方に示される気配りや優しさには、ずいぶんと教えられることがありました。決して目立たない様にさりげなく、色々な方のことを心にかけておられました。私が丁度、十年前に赤坂で花屋を開いたときも、ずいぶんと御心配して頂きま



して、何人も、お客様を御紹介して下さいました。又、よくわざわざタクシーで乗りつけて「元気でやっているか」のお言葉と一緒に注文をしに来て下さいましたので、先生が現在でもまだ、いきなり店へは行って来るような気がしてなりません。

「ローターアクトの目的とは何か?」「ローターアクトの奉仕とは」と云った問題がいつも私達の大きなテーマでしたが、18才から25才と云う若い時期に、峰先生と同じように素晴らしいロータリアンの方々から、色々と教わったことで、一人前の社会人になって行くということが、私達の問題の筈であり責任ではないかと思えます。私にとって、ローターアクトと云う場に巡り会え、本当に有り難いことだとロータリアンの皆様方に心から、感謝しております。

峰先生、本当にたくさんの御指導と思い出を有難うございました。心より御冥福をお祈り申し上げます。

# 山田さんを思い出して

東京千代田RAC

OB 平田 幸彦

ローターアクト活動の目的や意義、活動の方向性や具体化などについては、提唱以来、今日まで多くの議論がなされてきております。現在もRACで活動している会員やローターアクト委員の方々の間では、色々な御意見が出されていることと思います。二十年で歴史を閉じてしまった私達、東京千代田区RACでも、クラブの歴史の中で、会員不足、プログラムのマンネリ化などの悪循環に陥ると必ず「ローターアクトの奉仕とは？」と云う深みに足を踏みいれてしまったものです。

「ローターアクトは、何をやっても良いクラブ」と云われます。しかし、この「何をやっても良い」と云うのが「何をやったらよいのか」と云うことと隣り合わせのもので、時として非常に大きな問題となって、私達に重くのしかかってきました。この深みにはまると、例会が単なる連絡事項の報告の場になってしまい、残った時間も進展の期待できない議論になってしまうのです。

この様なとき、例会に出席されていたロータリアンの方々から、色々なアドバイスを頂いておりましたが、山田さんのお話は、どこかエネルギーで私達より若さ一杯という感じでした。「何とレベルの低い話をしているのだ。」とかなりあきれていたのかも知れません。何かじれったそうな早口も、どうして、もう少し行動的になれないものか、と云う気持でおられたのでしょうか。曖昧な議論をしないで、問題点を一つず

つチェックして、自分達が本当に何をしたいのかを確認しながらプログラムやスケジュールを作って行けば良いのだと、熱っぽく語って下さいました。一般的に日本の若者は、自分の意見を正しく発表すると云う訓練が十分になされていませんが、海外での生活が長かった山田さんからは、話し方からも、所謂、国際感覚が伝わってきたものです。

もう一つ、私が山田さんについて印象強く思い出すことがあります。十周年の会より一～二年前の事だったと思いますが、クラブ奉仕の行事で、皇居の東御苑に行った時のことです。当時、千代田の会員に宮内庁の侍従職にいた女性がおりまして、彼女の案内で出かけました。苑内の散策が終わり、内堀通りの歩行者天国に出て来たところで、偶然山田さんがスポーツサイクルに乗って、さっそうと現われたのです。サイクルウェアもお似合いで、日焼けした顔にサングラス、半袖シャツにサイクルパンツが見事に決まっておりました。あの例会でのエネルギッシュのイメージそのままと云う感じで、短い会話の後、又、軽快に走り去って行かれました。あの時又、私達は「若さ」と云う意味では、山田さんに負けていた様な気がして、私にとっては、今でもはっきりと思い出すことのできる場面です。

いかにも健康的で、エネルギッシュな山田さんが、病気になられたと聞かされたときは、別の山田さんがおられて、そちらの方ではないかと思った位です。

18才でローターアクトの創立に参加させて頂いて、二十数年が過ぎ、私も経験不足と云う言い訳ができない年令になって参りました。私にとって、ローターアクトで活動できたことが、何よりも自分を成長させてくれた気がします。山田さんやロータリアンの皆様に心から感謝申しあげると共に、山田さんの御冥福をお祈り申しあげます。

## 峰先生と私達RACとの出会い

東京千代田ローターアクトクラブ

OB 甲斐志権

此の数日、峰英二先生との思い出を考えたり、東京千代田RAC創立十周年記念誌を読んだりして、あっそうだ、あの時も一緒だったと色々と思い付く所はさすがだなーと思ってしまいました。そしてその時々的情景が思いだされ懐かしさでいっぱいです。

私は先生との出会いは1976年度にRAC委員に先生がなられ、私たちの例会に出席されてからと思っていたのですが、厳密に言えば私が1973年度にRACの会長に就任した時、麹町RCの例会に出席しロータリアンの皆様の前でご挨拶した時かなと考えたりもしました。それ以後親しくさせて頂き、1978年夏、私事ではありましたが、スキューバダイビングスクールに入会する時に、健康診断書が必要だったので峰先生にお願いして九段坂病院に出向き、先生に診察して頂きました。まあ、アクターで先生に診察してもらったのは私ぐらいでしょう。その時の先生との会話のやりとりは『岑君、何処か悪い所があるのかい』『いいえ、ありません』『じゃあ健康体だよ、所でローターアクトはどう、うまくいってるかい』と聞かれました。たいした眼力で参りました。誠に名医ですね。

峰先生はアクトの例会だけでなく幅広く私たちの行事に(例えば沖縄での年次大会、第252地区との仙台、気仙沼等々での交歓会)参加され、

在京だけでなく他地区のローターアクトクラブからも知られ、慕われていました。思うにローターアクトの誰れもが知っているロータリアンと言える人はそう多くなく、峰先生は広く他クラブのアクターにも知れ渡っていたと言う事は、それだけ積極的に私たちと行動を共にしていたからだと思います。

又、参加すると同時によく発言され、協力的で強力な味方でもありました。私たちにとって大変都合の良いロータリアンでした。だから余計に私たちは峰先生に好意的で甘えっぱなしの好ましい(?)相互関係でした。峰先生は私によく言っていました。『岑君、ローターアクトはいいね、年齢制限が無ければ私もアクターに成りたいね』と。私自身も28歳を過ぎていてOBに成っていましたので一層の事、年齢制限を無くして、私共々アクターになって欲しかったのです。

私が小さな中華料理店を始めて、半年位たった初夏の日曜日の午後一時頃、前触れもなく店に入ってきて来て、

「岑君来たよ、おいしい料理を食べさせてくれない！ でも最近たくさん食べられないから娘も一緒に連れてきたから」と言って、若い女性を伴って笑っていました。

本当に優しいお言葉ありがとうございました。

本当に優しい心遣いありがとうございました。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

## 峰先生を偲んで

東京千代田RAC

OB 武山玲子

泉ロータリークラブの本郷先生からのご紹介で、初めて峰先生にお目にかかったのは1980年のことでした。仙台に生まれ育ち、当時四谷に勤務していた私は、千代田ロータクトに仲間入りさせていただくことになり、峰先生は入会する前の私に、峰先生と本郷先生のご親交、そしてお二人を通じての各RACの交流について、色々とお話しして下さいました。

初めてお会いして緊張ぎみの私を峰先生はユーモアたっぷりのお話で、すぐ和ませて下さいました。特に千代田RACの皆様のことを話される時の峰先生は、まるで自分の宝物を自慢されているような、慈しみ、愛情にあふれる表情で、先生ご自身の優しいお人柄を、私はそれにより感じ取りました。

その後千代田RAC入会後もアクトの活動を通して先生に何度もお目にかかれる機会を得ましたことは、とても幸運であったと思います。ロータリアンで、目上の方であるにもかかわらず、先生はいつも気さくに、まるで私達アクトの一員のようにとけ込まれ、又その一方では、私達の相談に的確なアドバイスを与えて下さり、文字通り導いて下さいました。私達は峰先生との触れ合いを通じて、人間として、大人として成長することを学んだと言っても過言ではないと思います。

峰先生にはとても多くのことを教えて頂きました。と言っても、先生

がお説教じみたことをなされたという記憶はありません。その笑顔を拝見したり、短い雑談を交わさせていただきただけで、千金に値するようなご自分の人生観をさりげなく私達に伝える事ができる。峰先生は、そんな方だったと思います。

例えばある時、確かRACで国立市の『神の国寮』を訪れた時だったと思いますが、移動中の雑談で私は先生に、「先生、私はこれまで、自分には運動神経がないものと思っていましたが、最近アイススケートを始めました。スケートはたのしいのですが、どうもスケート靴が重くて、持ち運びで肩がこりそうで時々おっくうになってしまいます。」と、怠け者でめんどくさがり屋なことを、冗談を交えながら告白しました。先生が笑いながら「まだ若いのに何言ってるんだ。僕はこの年齢で、今だにスケート靴どころか、アイスホッケーの道具一式を肩にかついで、どこへでも出かけてプレーしているよ。」とおっしゃったのには驚かされました。

就職2年目で、都会の一人暮らしや、仕事の多忙さにやや圧倒されぎみだったその時の私にとって、医師としてのお仕事、ロータリアンとしての活動に追われる先生に、どこからそんなエネルギーが来るのかは、まさに謎でした。それに確か先生は他にも多くの趣味があって、音楽だってプロ級のはず。—先生はやっぱり、スーパーマンのような方だ。先生はすごい。—と、ただただ、感心させられたのでした。

そのうち私は、先生のすごさは、全ての事に興味を持ち、熱心に追い求めるところから生まれていることに気づいたのです。人間として、大人として、自分の役割を果しながら、しかも自分にとって魅力的な物(例えば後輩の指導、奉仕活動、様々な趣味等)にも常に真摯に向き合い、決してエネルギーを惜しまない。先生のきらめきは、そんな強さにより

支えられたもの。きっと先生は、人生が与えうる魅力的な一瞬一瞬を大切に、愛する方なのだ自分なりに解釈させていただくようになりました。そして今思えば、そういうひたむきさを内に秘めた方だったからこそ、赤の他人の生意気な小娘や、未熟な若者の私達に、あれほど優しく惜しみなく接してくださることができたのかしらと、改めてその生きざまの素晴らしさに深く敬服させられてしまいます。

あんなに輝いていらした峰先生が、この世にいらっしゃらないのは、何年も過ぎた今でもとても信じがたいことです。今も時々私は両親と、峰先生がたまたま会合で仙台へお越しの際、わが家へお立ち寄り下さった時の事を思い起こしております。その時先生は、母の手作りの田舎料理を「おいしい、おいしい」と召し上がって下さり、初対面の両親とも色々なお話がはずみました。一度お会いしただけで、人の心を和ませ、そのお人柄の鮮明な印象を残される先生は、人との出会いを大切に、人生を愛する魅力あふれる方だったと思います。

私はと言えば相変わらず甘えん坊のオフィスレディとして中途半端な人生を歩んでいます。それでも趣味のスケートだけは、進歩がないながらも十年余も続けることができました。ストレスなるものに負けそうな時も、この趣味のおかげでなんとか頑張れるにつけましても、峰先生のような方にお会いできた自分の人生の幸運さを思わずにはいられません。好きな事、好きな物に一生懸命になれる瞬間。その一瞬一瞬それ自身が、『幸せ』というものだということに気づかせて下さった峰先生には、改めて感謝の気持ちに絶えません。



## 山 田 ・ 峰 会 員

1968. 6. 17 チャーターメンバー

権 田 良 彦

山田会員・1924年生、1970年入会、1972年再入会。

峰 会員・1920年生、1973年入会。

御両人は、誠に立派なそして当クラブに最も相応しい会員であった。

山田氏は、小生の末弟と旧制東京高校での同級生であったので、特に親しみを覚えたものであった。

当時、当クラブに川端会（川の端（河岸）には杭（食い）許り）なる旨い物を食べ歩く同好会があり、両君も小生同様熱心な会員であり、又相当な食通で、実に楽しく御一緒に諸所方々を尋ねて廻ったものであった。

ロータリアンとしての山田氏には、海外に於けるクラブ・ライフの経験もあり、ロータリーの在る可き姿を機会を捉えては各方面に説明して居られた。

峰氏亦熱心なロータリアンで、其のS.A.A.での御活躍には、全く敬服させられるものがあつた。

処で、両君の南インドでのインドはしか免疫プロジェクトのボランティア活動は、実に素晴らしい快挙であり、其の御苦勞には文字通り筆舌に尽くし難いものがあつたのである。

此の活動は、御両人に始まり、当クラブを通じて他のクラブへ、そし

てやがて地区、R.I.とワールド・ワイドに広がって行き、時日の経過と共に赫々たる好結果を其の偉大な業績として収め得たのである。

併し乍ら両君の御活躍には大変な御苦勞があったし、御話に依れば、在印中の列車旅行等では全く酷い塵埃に塗れ呼吸すら困難な事もあった由、過酷なボランティア活動が両君の大切な健康を著しく蝕んだ事は事実である。

斯くして率先一身を挺しての行動は、所謂「身を殺して仁を為す」の最も崇高な奉仕活動であり、御両人の御功績は固より、当クラブの大いなる誇りであり、また地区の、日本の、そして世界の偉大な業績なのである。

御両人を喪った事は、御家族は勿論、私共にとっても、極めて悲痛に堪えない処である。併し乍ら御両人の御遺志は、永く関係者一同の、そしてロータリークラブの内に輝き続けるのである。

天国に在る御両人よ、何卒安らかに眠り給え。 合掌。

(平成6年3月9日・記)

## 彝 さん の こ と

1968. 6. 17 入会 チャーターメンバー

今 中 祝 雄

私が幹事を拝命した82～83年度は当クラブ創立十五周年に当り、何か式典か記念行事をやらねばということが、理事会の議題にのぼっていた。

15年といっても大した基金がある訳でもなく、寺中会長も出来る丈、有意義にして簡素にという意向であったので、思いあぐねていたところ、偶々彝さんからポリオの予防ワクチンをインドに寄贈するプロジェクトをやらないかという提案があり、渡りに船とばかり乗ることになった。

とは云っても一同ポリオの恐ろしさ、又ワクチンの保存の難しさ、などを認識していた訳でもなく、第一にインドといえ、ガンジーとかガンジス河ぐらいしか脳裏に浮かばない我々にとって、現地でのワクチン投与作業がどれ程困難なものか想像も出来なかったのである。

おそらく彝さんも、内心では我々の余りの無知さに苦笑しておられたに違いない。それからというもの、或日はワクチンの製造工場を見学して説明を受け、或夜はボンベイから見えたロータリアン共々、自分で撮って来られた写真を手、ポリオ患者の悲惨な状態を聞かされ、等々連日連夜のようにレクチャーを受けた次第である。

処が今度はクラブ内部からロータリークラブは寄付団体ではない。我々の理念はI. SERVEであってWE. SERVEではない筈だ。第一そんな僅かなものを寄贈したところでポリオの予防に何の役に立つもの

ではない。おそらく末端に行きつく迄にどこかえ消えてしまうのがおちだという反対論が出て来た。

成程、云われて見れば是も正論であり、当時の我々は右に流され、左に流されまったくのところに波間に漂う小船のような状態であった。

しかしながら、寺中会長と彝さんの、たとえ貧者の一燈であっても、一夜の飲食に費やすよりは余程意義のあることではないかという、粘り強い説得が功を奏して、とうとう理事会の承認を得ることが出来た。

それも最低三百万円位はという話しを、どんどん値切って結局百万円で決着をつけた訳である。金額はとも角、如何にボランティア活動とはいえ、十分な精神的バックアップもなく、山田・峰両会員をインドに送り出してしまったことは、今にして思えば、あの水泳で鍛え抜かれた彝さんの強靱な肉体が病魔にむしばまれる一因となったのではないかと、忸怩たる思いで一杯である。

ともあれ類まれな情熱と行動力、それを裏付ける精緻な計画性と企画力、それが貧者の一燈をあの大膽なポリオプラスとして結実させたことは言を待たない俟たないであろう。

私にとって彝さんはまさにスケールを超した巨大なロータリアンであった。けれども反面こよなく酒を、運動を、そして人生を愛された彝さんの、小さな老眼鏡をかけて懇々と話しかけられた温顔は、何時までも私の臉からきえることはないであろう。

## 偲 ぶ 草

1968. 6. 17 チャーターメンバー

阿 部 敬 二

20年ほど前、当クラブに権田先輩を会長に食べ歩きの会「川端会」が発足しました。いまでこそ飽食の時代とかで、TV・雑誌でも「食」をテーマにしたものがめじろ押し、周囲にはグルメ情報があふれていますが、当時はまだその兆しが見え始めた頃といえます。丸谷才一が「食通知ったかぶり」を文藝春秋に連載しはじめたのが昭和47年秋で、全編食事の快樂だけを描いた小説「新しき天体」（開高 健著）が出版されたのも昭和49年頃のことと記憶しています。

「川端会」は2・3ヶ月に一度の割合で、「川端は杭(食い)ばかり」とシャレて、うまいもの屋を探し食べ歩きながら、会員相互の親睦の絆のひとつにしていました。

その世話人が山田彝さんでした。山田さんの博学多才ぶりは周囲の多くが認めるところ、「食」に関してもその例外ではありません。ただし、クラブ随一のグルメ(且つグルーマン)という周囲の定評に応えべく、山田さんは人知れぬ努力を続けられていたように思われるフシがありました。『美味求真』『食道楽』など戦前の名著も読破したり、毎回、通い慣れたる馴染みの店というわけにはいかず、会場に選ぶべく「うまいもの屋」をいつも探し回っておられました。東にうまい店があると聞けば試食に行き、早速ウラを返して馴染み客を装い、西に変わった料理を出すレストランがあると知ると飛んでゆき、料理談義でシェフと常連顔

負けの親密な関係になるといった特技を発揮されていました。

川端会ばかりでなくロータリーのあらゆる場面で、山田さんのなにごとにも熱心に取り組む姿勢、旺盛なサービス精神に接し、そのつど頭のさがる思いでした。

ロータリーの3Hボランティア活動に参加されたのもこの旺盛なサービス精神からだったと思います。RI第320、321地区のプロジェクトに依頼されて最初に南インドに行かれたのが、1982年の1月のこと。約1ヶ月後に帰国され成田でお目にかかった時、「インドでカレーを食べ過ぎたんですか」と冗談に紛らせましたが、素人目にもかなりの黄疸症状がみられました。気候風土の違う国で、過酷なスケジュールのなか飛び回られての疲労困憊ぶりは、お話を伺うまでもなく、まっ黄色なお顔が明白に物語っておりました。

当初麹町RCの創立15周年事業としてスタートし、のちに国際ロータリーの大プロジェクトにと発展していく「南インド・ポリオワクチン投与計画」の推進役の山田さんは、持ち前のサービス精神から、十分な回復を待たず次の活動に突き進んだ結果、病魔に侵されたのではないかと、いまでも思っています。

「南インド・ポリオワクチン投与計画」の実施のため、1984年2月に山田さんとご一緒にインドに行かれた峰さんも、サービス精神の旺盛な方でした。ある晩、二次会・三次会と酒が進んだ席で、しみじみと語られたことがあります。

終戦直前、潜水艦軍医だった峰さんが、何かの行き違いで乗船できなかった自艦が、その晩に撃沈され多くの戦友たちを失ったそうです。

『……本来、俺はあの時死んでいたのだから、60歳になったらボランテ

イア活動に徹し、世の中になにか役立ちたいと思っている……』という内容で、私には忘れられない話として鮮明に覚えています。

死地をさまよう戦争体験をした方々に共通する人生観のようなものが、このお二人の行動にも感じられました。

ロータリーの「奉仕の理想」「奉仕の精神」を言葉として口にすると、私には少々違和感のある響き聞こえるのですが、つねづねお二人が自然体で具現化されていたサービス精神が、それに近いものではないかと理解すると、自分にもできることがあるかも知れないという気になり、勇気が湧いてきます。

## 故・山田彝会員回想

1968. 10. 28 入会

有山房夫会員

山田さんは吾がロータリークラブの親睦委員会の典型的な人物であったと思います。カワバタ会を発起され会員の親睦として、月例的に会員の紹介で、美味しいお店を選び、交誼を深めたものです。

御父君が鹿児島出身の有名な小説家であり、私も同郷であることで良い友人として、共に語り、飲み食べたものです。また朝夕、彼は自転車でよく運動と称して、麴町界限を乗回しておられたことを思い出します。「運動になりますか」と問えば、足の運動になり世俗から離れるから、体に良いとの説明を受けたことがあり、更に所持されていた自転車の「ギア」の優秀なことを自慢しておられました。確かギア切替が数箇所あって、非常に軽くこげるとの事で、楽しみながら運動できるとは、やはり山田さんだなと感心致しておりました。

山田さんはロータリー入会以前、バンコックにて勤務、海外生活経験があり、加うるに外国語も良く話され、とくに外国大使との連繋が多かったようです。南太平洋の某国大使が来日のとき、焼酎工場設置の希望者を探してくれないかと頼まれ、現地には太郎芋が多く生産される旨を説明されたことがありました。

以上、いろいろの思い出がありますが、書くに果しなきものがあります。短き乍ら御冥福をお祈り申し上げます。



## 故・峰英二会員回想

1968. 10. 28 入会

有山房夫会員

峰先生が吾がロータリーに入会され自己紹介のときに「自分は旧海軍の医務官として、戦死せんとしたことが数回ある。それは出港が遅れたことが幸いで、本当に運がよかったからである。」旨を話されたことである。私(有山)も旧海軍に籍をおいていたことを共に話合い、以来九段坂病院に外来として診察するときは峰先生の紹介をしてもらうこととし、又数回、峰先生自身の診察を受けたこともあり、加うるに家族の医療は九段坂病院通いがほとんどで、娘の出産も産婦人科を紹介してもらって、親子三代御世話になっていたとき突然に帰らぬ人となり残念なことです。

先生は、職業奉仕として海外に出張、治療され、その名は世界のロータリークラブに「ポリオ」の義援運動として広がり、麴町ロータリークラブが先生と行動を共にされた故山田会員ともども、わすれ得ぬ人であることを想い、御冥福をお祈り申し上げます。

## 山田 彝 大人を偲ぶ

1969. 3. 10 入会

新 庄 勝 助

光陰矢の如し

ツネさんとお別れしてから、早くも5年の歳月が過ぎた。眼元をほころばせながら夏の夜長にフラッとやってくる、明るく陽気な人なつっこいツネさん。こよなく酒を愛し酒豪で物知り博士、雑学の大家、語学については知る人ぞ知るという方でした。少し鼻にかかった独特な雰囲気醸し出す話し方、何事も究めないと気のすまぬ性格、話はつきず時間を忘れさせられる。

そうだ、こんなことを思い出す。

小生の分野である薬学について、専門外なのに滔々と微に入り細に亘っての解説には脱帽の他ない。多趣味で東南アジアの研究と希観本の蒐集家であった。このような豊富な経験と知識に基づく、R.Cの運営に於ける指導力には誰しも尊敬と満幅の信頼を寄せられていた矢先、会長職早々、遠い遠い永遠の旅路に立たれ、断腸の思いであったであろうと推察する。R.Cでは私は山田会長を補佐する立場で、短時間であったのが悔やまれる。

南インドでポリオプラスに苦しむ子供達の調査に出かけられる折、ドイツメルク社製の「アテブリン錠」を呈したところ大げさに喜んでくれた様子が、つい昨日のような気がする。

さて、経歴が示す如く山田さんは、東京生まれながら鹿児島出身であると大変誇りにしておられた。父君(鹿児島出身)はご承知のきだみのる

こと山田吉彦(ファール昆虫記、気違部落その他)の著者、母君浜(仏文学者)である。

旧制東京高校から東京大学法学部を卒業され、日本レミントン・ランド、住友スリーエム、富士ゼロックス・東南アジア地域支配人を経て、マーケティング専門のコンサルティング会社MRDインターナショナルを設立。1982年国際ロータリー3Hに、インドのハシカ免疫プロジェクトのボランティアに選ばれて、二度にわたる長期滞在に挑戦された勇氣ある行動は、崇高としか形容がない。実に奉仕の為に命を捧げた人生、波瀾万丈の一語につきる。

健康については殊更に神経質なほど気を使う方でした。水泳や自転車が得意で、とくに自転車については英国製で貴族趣味、颯爽と走る後姿が思い出深い。当クラブでは懇親の実を上げるための“食べ歩き同好会”があった。それを主催され、珍味を探すのに先ずご自分で試食されてから選定されるので、10kg以上もオーバーになった笑い話がある程、コリ症とお世話やきな方でした。彝さんに頂いたギリシャのブランデーのツボの絵柄が美しく、静かに見守ってくれている。全てが懐かしい。

入院中はかたくなに面会を断り続けられたツネさんの心中を察すると、無理にもお見舞すべきであった。本当に悔いだけが残り残念至極。

大きな身体の山田さん、安らかに永遠の眠りにおつき下さい。心からご冥福をお祈りいたします。のこされた奥様、お二人のご子息のご健康をお祈りし、拙い文を結びます。 合掌

## 山田 彝 君 の こ と

1970. 1. 2 入会

網 野 誠

山田彝君が本麴町ロータリークラブに入会したのは、私より8ヶ月後の昭和45年9月であった。事務局から回覧される新入会員の推薦書を見て、私の弟に確認したところ、山田君は旧制7年制の東京高等学校文科乙類での同級生であり、東大法学部でも一緒であったとのことであった。

弟の話しによれば、山田君は府立四中から東京高等学校の高等科に入ってきたが、父兄会に見えた同君の母君は、戦前の婦人には珍しく瀟洒な洋装姿であったのが、印象に残っているとのことであった。山田君の父君は天下無宿の放浪作家といわれ、終戦後間もない頃のエッセー風の風刺小説「気違い部落周遊旅行」やファールブルの昆虫記の翻訳で有名な、きだ みのる(本名 山田吉彦)であり、フランス留学期間が長く、また母君もフランス文学者として有名だったようである。それで山田君も子供の頃から西欧風の家庭の雰囲気の下に育ち、高校の第1外国語は独乙語であったが、むしろ英語やフランス語の方が得意だったようである。因に彼の難しい名前は、父君が尊敬する大正時代の著名な洋画家の中村彝氏にあやかってつけられたとのことであり、辞書によれば音で「イ」と読み、中国の天子がその宗廟に常に具え置く礼器のことであるという。

山田君は学生時代から軍国主義には反抗的であり、愛する女性のためには命は棄てられるが、国のためには命を棄てる気にはならないなどと云っていたそうである。それで昭和19年兵役に服するに際しても、陸海

軍の幹部候補生を志願せず一兵卒として入営し満州で終戦を迎えたが、ソ連での抑留期間中の通訳の生活を通じ、ロシア語も身につけたようである。

このように山田君は家庭の影響もあっただろうが、外国語には特に豊かな才能に恵まれており、大学卒業後も日本レミントン、住友スリーエム、富士ゼロックス等専ら外資系の企業を転々し、富士ゼロックスでは海外事業部長を経て東南アジア支配人として昭和43年までバンコックに在住した。同年帰国後国際マーケティング専門のコンサルティング会社MRDインターナショナルを設立し、昭和45年に国際ビジネスコンサルタントの職業分類で当クラブに入会したものである。山田君はバンコック在住中に現地のロータリークラブのメンバーとしての経験もあってか、入会時からロータリーに関する知識も豊富であり、他のクラブの会員や海外ロータリークラブの会員とも積極的に交際して、奉仕の機会としての親睦に意を用いた。またロータリーの在り方については、彼なりの見識を持っており、折に触れて当麴町ロータリーの運営についても何かと具体的な意見を聞かされたものである。

たまたま昭和53年、私よりクラブ歴も年配も古い会員が、チャーターメンバー2人を含め、6～7人も居ったにも拘らず、頼まれれば敢えて否とは云えない正直者の故に、私は、当クラブでは会長ノミニエでもある副会長を引き受けざるを得ないこととなった。次期副会長には幸い、故千葉源蔵文芸春秋社長にお引受け戴いたが、幹事を誰にお願いするかは色々迷った。会長を引き受けた以上、クラブの発展のため最善を尽くさなければならないのは当然であるが、自らはあまり自身もなく、かつ、物ぐさの故に、結局山田君の積極性とそのロータリーについての知識や、彼の素質能力を発揮して貰うことによりその責を免れることがで

きないかと考えた。山田君は組織の中でラインのコースをたどって行くタイプではないが、委されれば意欲的にその素質能力を發揮するタイプのように想われた。そこで次期の理事その他の役員の構成や理事会の運営などは原則的には一切委せるから、会長になったつもりで幹事を引き受けて欲しい旨要請した。山田君は自分のやりたいようにやらせて呉れるならとのことであったので、山田君自身が推薦した理事から特に強い異見が出ない限り、山田君の幹事としての行動には、一切口を出さないとの条件で引き受けて貰うこととした。主として山田君と、山田君が推薦して理事をお引受け頂いた諸氏により運営された1979年～1980年の麴町ロータリークラブは、それぞれの諸氏の創意ある意欲的、積極的な活動によって、本クラブにおいては、山田君が業績報告書の中で「これが始めてです」と報告しているような数多くの業績があった。その中には私の措置が拙劣であったため、会員の皆様が不愉快に思われたであろうような事件もあったが、兎も角活気があったし、一つの転換期であったようにも思われる。評価は当時の会員の皆様にも色々あると思われるが、その功罪の半ば以上は山田君に負うところが多い。

山田君の生涯は、会社組織の中では十分評価してもらえなかったその素質能力と積極的な意欲とを、ロータリーの奉仕の生活の中で、最後には今回のポリオ免疫プロジェクトの推進を通じ、燃焼しつくすことによって、その情熱をロータリーに捧げたものといえよう。

御冥福をお祈りする次第である。

## 山田彝さんと峰英二さんの思い出

1970. 10. 15 入会

新 村 重 晴

もう23年も前のことですが、山田彝さんは私より僅か1ヶ月位前に当クラブに入会されたばかりでしたし、年頃も同じ位だったので、新入会員同志という気安さで私達は例会ではよく話をしていました。

そのころ、私にもイニシェーションスピーチの順番が廻って来ましたが、どんなことを話して良いのか戸惑っていたところ、山田ツネさんがイニシェーションスピーチの時だけは自分の経歴の他に、仕事の宣伝を大いにして良いのだ、と教えてくれました。ツネさんは外国駐在中にロータリークラブに入っていたとかで、新入会員であるにもかかわらずロータリーの事をよく知っているなど思ったのが知り始めた頃のツネさんの印象でした。

峰英二さんは、成城高校出身で私よりは3年先輩でした。峰さんが成城高校を卒業された年に私が入学したことと、運動部も違ったために、峰さんが私より2年余りおくれて入会されるまでは面識がありませんでした。

しかし、同じ高校を卒業したということでお互いに親しくなったのですが、入会された年のクリスマスパーティーでしたかギターを弾き語りして大活躍をされた峰さんにはビックリしました。その後で峰さんの同級生に聞いてみましたら、在学中からハワイアンでは活躍されてかなり有名だったそうです。

また、スポーツは万能選手でサッカー、ウォーターポロ、アイスホッケー等々何でもこなし、インターハイには各部から頼まれて出場していたとのことでした。実に人柄が良く、医者としてもお世話になったメンバーが多かったようでした。今、考えれば峰さんは何事によらず真面目に取り組む方だったのだと思います。

一時期、ロータリーに少し間をおいていた私には、このお二人がどんな経緯でポリオ・プラス・プロジェクトに、あのように深くかかわるようになったのかは判りませんが、よくもあんなに奉仕できるものだと思っていました。私にはとてもできないと感心しつつも、お二人ほどロータリーに熱心でなかった私の遠慮からか、その動機をお二人に聞いてみたいと思いながら、とうとう聞きそびれてしまったのが残念でなりません。

ポリオプラス・プロジェクトを提唱して世界のロータリークラブを動かし、東京麹町ロータリークラブの名声を高められたお二人でしたのに、この世を去られるのが余りにも早やすぎたという感を深くしております。

お二人がロータリークラブに残された偉大な貢献に心から敬意を表し、ご冥福を祈り、思い出と致します。



## 奉仕に散った先達を偲んで

1970. 10. 15 入会

久木野 利 光

1. 山田彝さんは麴町ロータリークラブの二十代目の会長をつとめられました。会長就任の所信のなかで、「① 人間が自分に贈ることができる最大のプレゼントは健康であると言われています。② 人間の最も貴重な財産は自分が自由に使える時間とされています。」と述べられました。
2. 彝さんは外国製の高価な自転車で体力の増進に留意されていた。特定の企業にしばられないで世界の企業を相手にコンサルタント業務を職業とされて、自由に使える時間を持っておられた。会長所信をそのまま現実の生活の中で体現されていた。
3. その彝さんが会長の任期途中の11月中旬に突然入院され、そのまま会長任期終了後間もなく永眠された。死に至る病の原因は明らかにされていない。彝さんの入院後は新庄勝助副会長に御指導をいただいた。彝さんと峰英二さんは1982年、国際ロータリーの3Hインドはしか免疫プロジェクトのボランティアに選ばれて、インドで約1カ月2回に亘る奉仕をされた。  
その後、彝さんと峰さんは相前後して永眠された。インドにおける奉仕の中で未知の病原菌におかされたのではないかと思えてならない。
4. 私は会長彝さんの下で幹事をつとめさせていただいた。

ある日、ぶらりと言う感じで私の事務所を訪問され「会長をやれと言われている。幹事を引き受けて助けてよ」と言われた。郷土鹿児島先輩でもあり、微力ながら幹事を引き受けることになった。

5. 当時麴町ロータリークラブは創立二十周年に当たり、記念行事として大規模なプロジェクトを組んでいたが、幹事在任中彝さんから細かい指示を一回も受けたことがない。大きな体で悠揚としていて、彝さんが居るだけでその周囲が明るくなる得がたい人柄で楽しかった。

彝さんが元気であつたら麴町ロータリークラブ出身の2580地区ガバナーとして腕をふるったに違いない。残念でならない。

6. 彝さんは酒が好きで酒席が良く似合う人だった。飲み始めると何時になっても帰ろうと言わなかった。酒席で父君きだ・みのる(本名 山田吉彦 作家・社会学者、著書・東京気違い部落、にっぽん部落など)の話しを時々聞いた。

彝さんの話しぶりで父君を尊敬されている様子がうかがわれて羨ましい程であった。父君がパリ大学卒業、血筋を引いたのか彝さんの語学能力は抜群であった。

7. 峰さんは泌尿器科の専門の医師で、コーラスの好きな親切な人柄で皆に親しまれた。

ロータリーの奉仕活動の中では、特に青少年の育成に力を尽された。千代田ローターアクトの奉仕活動に特に熱心であった。峰さんが健在であつたら麴町ロータリークラブが千代田ローターアクトのスポンサーを辞退することはなかったであろうと思われる。

8. 東京麴町ロータリークラブは、創立二十四周年の中分会長のもとで「山田・峰社会奉仕賞」を創設した。

国際ロータリーは1986年7月から5年間に亘り、地球上からポリオなどを撲滅することを目標に、1億2,000万ドル（約200億円）の募金キャンペーンを実施し、その目標を達成した。我が国での募金総額は48億円に達した。

この国際ロータリーのキャンペーンは、東京麹町ロータリークラブが2580地区と2750地区の各ロータリークラブにポリオの撲滅運動を提唱し、これが国際ロータリークラブの運動として発展したものである。

東京麹町ロータリークラブの会員であった彝さん、峰さんのお二人は、早くからポリオの惨状に深い関心をよせられ、南インドでポリオに苦しむ子供たちの調査を2回に亘り実施され、その状況をつぶさに報告された。この調査報告が東京麹町ロータリークラブのポリオ撲滅運動提唱の原動力となったものである。

東京麹町ロータリークラブは、故山田・峰両会員の国際ロータリークラブポリオ・プラス活動における優れた功績を顕彰し、社会奉仕の分野において優れた活動を行い、顕著な業績をあげられた個人、グループ、団体及び会員を表彰し、これによって社会奉仕活動の充実発展に寄与しようとするもので、奉仕に倒れた先達を悼む会員の心を表すものである。

## ツネさんを偲ぶ

1971. 5. 12 入会

中 分 亨

ツネさんとの出会いは、私が1971年5月に麴町ロータリークラブに入会した時である。最初に配属された委員会は国際奉仕と、ローターアクトの両委員会であった。ロータリーの先輩から入会した年はクラブにはやく馴染む為に、出来るだけホームクラブへ出席するように教育されていたので、私はホームクラブの出席率80%を心掛けていた。国際奉仕委員会の役務に海外からのビジターの紹介がある。委員長は沢田さん、委員にはツネさんと近浪君と私である。当時は海外からのビジターのない日は珍しい位であった。ツネさんもどう云うわけか出席率は悪い。委員長はやって下さらない。当然慣れない私が壇上に立つ事になる。何とかこなしていたが、正直精神衛生は良くなかった。ビジターが1人、2人の時はまだ良かったが、或る時、日本での国際学会の流れで10数名のそれぞれ国籍の違うビジターがメーキャップにやって来た。相変わらず頼りのツネさんも委員も誰もいない。私は事前のチェックもままならず、10数枚のカードを手にして、壇上に上った。

スペルの読めないカードを適当に読んで紹介したところ、自分の国籍が違っていたので訂正してくれと申し入れられたり、随分対応にとまどった事があった。20数年前の入会一年生の経験であった。

欠席がちのツネさんは何か仕事の関係で、この年度の終り1972年6月にクラブに退会の申出をされ、正式に退会、1ヶ月後に再入会されたの

である。仕事の内容の変化について、じっくりきく機会もなかったが、以前より時間が取れる様になったとの事、私はツネさんがクラブへ欠席がちのお陰で一年間海外のビジターの紹介で、私一人恥をかいて苦勞した話しをした。そんな話しの切っ掛けから、ツネさんに英会話の個人レッスンを受ける事になった。毎週月曜日例会前にツネさんの麴町の自宅を尋ね、レッスン後、例会へ出席する様になった。故吉川さんも生徒の一人だった様だ。

はずかしながらものにならず現在に至っている。

ツネさんは7ヶ国語が話せる国際人で、ロータリー情報にも精通し、更に行動家であった。

1975年12月を第1回として発足した川端会(食べ歩きの会)も権田先輩と共に、10数回続いたが、うん蓄をかたむけて店選びをやり、更に事前に試食をしたりして、参加会員の為に良く面倒をみていただいた。

1978年には私が分区幹事の時、IGF(IM)のことで、東京クラブに故松本兼次郎先輩、網島女史を尋ねた折に、網島女史から、海外から児童画交換の申出がきているが、麴町には小学校も多いので麴町クラブで受けてみてはどうか……

早速クラブで諮ったところ、やってみることに話しがまとまり、其の後国際児童画交換プログラムとして数年間継続されたのである。

このプログラムにもツネさんの活躍が大きかった。永田町、番町、雙葉、白百合各小学校と米国のニューヨークの数校と、英国ヨーク州の小学校の絵画と交換して、それぞれの国で展示会が開催されたのであるが、海外への配送についてはツネさんのJCの友人・東京クラブの松岡信雄さん(当時航空会社の支配人)の手をわずらわし、タダで運んでいただい

た様で、私はこの事実を最近知った次第である。

行動家のツネさんと云えば何と云ってもポリオ撲滅運動である。

ツネさんの献身的な奉仕活動は、1980年4月にR I 東南アジア難民キャンプの奉仕活動志願者に峰ドクターと共に登録された。ツネさんが第12年度のクラブ幹事の時に始まった。1982年1月ツネさん3 H活動参加の為インドへ、2月15日にはクラブで帰国報告をされ、R I から3 H ボランティア活動に対する感謝状が届いた。

1983年クラブ創立15周年の記念事業として、ツネさんの示唆に基づき、南印度のマドラス地方の住民子弟を対象にするポリオ免疫プロジェクトを実施することになった。坪田副会長を実行委員長として、実行委員会を作り、実行案として、日本のポリオワクチン研究所において精製されたポリオワクチン約5千人分を購入して、山田ツネ・峰両会員にボランティアとして、現地においてマドラスロータリークラブの方々と協力して、ワクチンを供与服用させることになった。

この計画実施に要する経費は、ポリオワクチン購入費とボランティア派遣の為の交通費合併せて約100万円とし、R I 本部からの特別助成金も申請することになった。この計画の推進を伝え聞いた当258地区、隣の275地区からも経費の援助の申出があり、258地区の東村山、東京、浅草、秋川、足立他のクラブで66万円、地区から50万円の寄付を受け、275地区からは364万円の寄付が集まったのである。

1984年2月に再度ツネさん、峰ドクターは約1ヶ月、インドへ出向され、3月5日にクラブで帰国報告がなされた。8月には地区ガバナー賞が両会員に贈られ、10月にはスケルトンR I 会長賞を授賞された。其の間ツネさんは地区のW C S 委員長として、東奔西走の活躍ぶりであった。

こうしたツネさん、峰ドクターの献身的な奉仕活動は、国際ロータリーの世界社会奉仕部門の数多いプロジェクトの中で、ポリオ免疫プロジェクトが最優先順位に指定されたのである。R Iは1986年7月から向こう5ヶ年間の継続事業として募金活動をする異例の決定がなされたのである。その内容は5年間に亘り地球上からポリオ、ハシカ、ジフテリア、結核、百日咳、破傷風などの撲滅を願い1億2千万ドル(約200億円、日本担当分40億円)を目標として募金キャンペーンを実施することになり、1991年6月募金総額2億1732万ドルに達し、当初の目標をはるかに超えて、このキャンペーンを終了した。日本での募金総額は48億9856万8628円に達したのである。

ツネさん、峰ドクターは志半ばにして、1988年クラブ創立20周年の記念すべき年にツネさんは会長職のまま、峰ドクター共々他界されたのである。きくところによるとインドの風土病によるものとの事、誠に痛ましく、壮絶な戦死の様な気がしてなりません。

1992年私が会長の年度に、久木野副会長のご提案を受けて、中央分区の会長幹事のご賛同をいただき、献身的な奉仕活動に専念し、逝去された山田・峰会員の遺徳を偲び、その功績を顕彰し、広く社会奉仕の分野において優れた活動を行い、顕著な業績をあげた会員、民間の個人、グループを表彰しこれによって社会奉仕活動の充実発展に寄与することを目的として、山田・峰社会奉仕賞を設けさせて頂きました。

1988年7月、ツネさんのお別れ会からはや6年が経過いたしました。クラブとしても惜しい人材を失いました。

思い出の一端をつづりご冥福をお祈りいたします。

合掌

## 故 山田・峰両会員に捧げる

1972. 3. 6 入会

山 下 寛一郎

山田会員には、青年会議所の先輩として「お前はクラブ・ライフを楽しんでいない。」と忠告していただきました。二十才代の私には、右を見ても左を見ても、年長の方ばかりでなかなか馴染めなかった頃です。

有り難い言葉に励まされて、例会毎に、まず一人の方とお話をさせていただこうと努力しました。「クラブ・ライフ」を楽しめる様になったのは、幹事をさせていただいた時までかかりましたが。

峰会員には、六本木ヘダーツをしに連れてもらったおり、外人の方々と共に、エンジョイされ、何時になっても帰ろうとされない姿が残っております。又、私が血尿をだした時、遊層腎と診断していただき、適切なアドバイスをいただきました。

お二人より友情と健康を教えてくださいましたが、命を懸けてなされたあの「奉仕」については、まだまだ、これから勉強させていただきます。

安らかにお眠り下さい。二人の大先輩。



## 彝先生との出会い

1972. 4.17 入会

齋藤純生

部活(社会科学研究会・柔道部)に熱中の余り大学受験準備を怠り、一浪を覚悟、苦手だった英語の補修を目指し、予備校替わりに千駄ヶ谷の津田スクール・オブ・ビジネスの予科を選択、高卒後1年籍を置くことに成りました。

当時の日本の国情は、戦後の荒廃からの復興途上にあり、Pax Americanaに表徴されるアメリカの強大な経済力が世界を支配しておりました。本来、ジャーナリズム志向の私にとって、海外特派員を目指すかぎり英語が何は扱置き必須の素養であることを念頭に、この専修校での1年が経過しました。

当時、芝公園にあったアメリカ文化センターの図書館へ授業後日参、ジャーナリズム関係書の読書に専心しました。津田での1年の浪人生活は、殊の外快適で、その授業内容も、通常の四年制大学に比べ遥かに充実しておりました。そこで、四年制大学受験への志は捨て、予科2年に進み、最終コースの本科に至る3年を津田で過ごし、四年制大学の卒業生と社会人の世界で競う決意をしました。

津田の本科課程では、英文速記、英文タイプの授業があり、英文タイプ講師として山田彝氏の名前が教員リスト中にありました。今にして思えば、これがやがて麹町ロータリークラブで再会する彝さんとの、今から39年前の最初の出会いでありました。

当時の彝さんはレミントンランド社(米国有数の英文タイプライター・メーカー)の日本支社顧問として活躍するかたわら、津田でタイピングの非常勤講師を務めておられました。授業に登場する山田講師は100名程の学生(女生徒が約70%)を相手に、常に派手なアメリカン・ファッションのジャケットをダンディに着こなし、活気に満ちた授業を消化しておられました。勿論女子学生に対する配慮は格別で、そのスムーズでソフトな対応は、一部の男子学生に不快の念を感じさせるほど、優しく好意的であったように記憶しております。

授業中、時折教壇を下り、教室を巡回する折、小生の席で歩みを止め、「おい齋藤、卒業後はレミントンランドに就職しろよ」と小声でのメッセージを数回受けた記憶が有ります。にも拘らず、彝さんの好意に応え得ず、卒業後英国系出版社の日本支社に入社、半年を過ぎて渡英しましたので、その後の彝さんとの師弟関係は途絶えました。やがてレミントンランドから米国ゼロックス社に転勤、バンコックに設置されたアジア担当事務所長に就任されたと後年伺いました。

小生は1967年に帰国、事務所を神田美土代町から麴町四丁目に移設、1972年麴町ロータリークラブに入会することになりました。

1983年に至り、なんとこの山田彝先生が吾がロータリークラブへ会員として入会なさいました。これは氏の再入会であったことを後日伺いました。且つてのこの師弟の関係は、やがて気の合う中年紳士同志の付合に進展、都心の料理屋、酒場のあちこちで仕事から開放された時間帯を、折にふれて楽しむ仲間となりました。1987-88年度に彝さんは会長に推挙され、かのポリオ救済の一大プロジェクトを国際的スケールの大事業に結び付ける功績を果たすに至ったことは、当クラブ会員に止まらず、日本全国のロータリークラブ、ひいてはR. I.傘下の全世界のロータリアン衆知の事実であります。

この30年前の師弟関係が、やがてロータリークラブでの再会に至った奇遇は、私にとって意味深く、文芸に博識で、国際感覚豊かな上に、鷹揚円満な彝さんの人柄は、今日も私の心の片隅で生き続けております。大の食通で、好人物であった彝先生、今日も極楽浄土で友と酒をくみ交し、際限のない文化談義に花を咲かせていることを想い……………合掌！

## ツネさん、峰先生と私

1973. 1. 18 入会

藤井 吉兵衛

山田さんは、私と同じ大正13年3月生まれ、R.C歴は彼が2年半程先輩、博学多才というか、百科事典の様な男であり、語学も数ヶ国語を使いこなす、正に口八丁、手八丁、万能選手でありました。主に外資系のレミントン・ランド、住友スリー・エム、富士ゼロックス等で活躍され、ビジネス・コンサルティングを主としたお仕事をなさっておられました。

峰先生は私より4才年上の大正9年生まれ、R.Cには、私の次の月に入会された、同期の桜であります。千葉医大、海軍軍医学校・潜水学校を修了され、潜水艦乗組軍医として、最悪の状況下にあった印度洋で活躍。戦死の公報を発令されるも、シンガポールで終戦。捕虜生活3年余、生還され、九段坂病院に勤務、当クラブに入会されました。

私も、父の経営していた国産自動車工業株式会社(特殊自動車車体製造)から、昭和18年中島飛行機武蔵工場へ徴用され、勤労部で統計事務を担当中に、山口市の西部第四部隊へ入隊、幹部候補生に合格後、広島市に送られ戦地に派遣されるべく待機中、沖縄が攻撃を受けた為、急遽北九州に移動、戦闘なくして敗戦。復員するも東玉川の住居の外、全部灰燼と帰し、正に国敗れて山河ありを経験致しました。

山田さんとは、戦時中の事を話し合った記憶はありませんが、いずれも大正末期の生れ、R.C入会年次も同じ様なもの、お互いに仕事と考え方に多少の違いはあっても、大体同じ様な体験をし、悲惨な戦争を潜り抜けて来た思いは共通であり、何は無くとも、まずは一献と杯を重ねる事が多かった事も事実であります。又当時は、ロータリー情報委員会の活動も活発であり、炉辺会合(マントル・ピースは無くとも、酒だけは豊富)が毎月夕刻より午前一時頃迄、喧々諤々論争したものです。その要点は、ロータリーはアイ・サーブであってウイ・サーブではない。ロータリーは寄付団体ではなく、奉仕をする人々の集まりである。23-34の決議について教えこまれ、そのつもりでR.C生活を送っておりました。

87年10月12日開催されました、258地区I.G.F(現在のI.M)に於て、(付記・自72頁～至82頁)申し上げました通り、当クラブの15周年記念事業として山田・峰両会員は、南インドに出張して、現状を調査致しました。

調査研究位ならば一R.Cクラブでも何とかなるにしても、これが撲滅対策となるとR.Iとしても容易な事ではなく、論争の末、目標を1億2千万ドルと定め、募金する事に決し、吾国に対しましては2倍強の40億円が割当られ、日本のR.Cが初まって以来の出来事、第-23-34の決議を如何にするか、次年度以降を拘束する計画を建て良いものか難問続出、世論も別れ、大問題化しそうな時に、I.G.Fで当クラブがポリオについて考え方を発表する事になり、その担当を山田会長が私を指名いたしました。一つの地区のしかも一分区のI.G.Fではありますが、当クラブが最初に調査に着手した事は、熟知の事でありますので、如何なる考えか気になるところでもあります。

私は、R.Cの基本は、ウイ・サーブではなくアイ・サーブが正しいと考えておりましたし、次年度以降の活動計画を拘束する様な、長期計画を建てる事は如何なものか？ この私の考え方を山田会長は良く承知の上での指命であります。

R.Cは頼まれたら如何なる場合も断つてはいけない事は、理解しているつもりですが、いくらなんでも、山田会長と峰先生が二度に亘って渡印され、情熱をかたむけられた計画に、水をかける様な事は出来ませんし、自分の考え方を曲げる事も本意ではありません。再三再四に亘り辞退方を話し合いましたが平行線で、「貴方の考え方を話して欲しいと頼んだのだからそれだけで結構、事の成否は別問題」と譲りません。事の性質上、誰にでも相談できる事では無く、日時は切迫するし、無能の自分には万事窮す。何日も何日も考えました。そしてアイ・サーブ(23-34)と継続事業の件は、一時棚上げする。今日の日本があるのは、敗戦国にも拘らずアメリカが援助してくれたお陰であり23-34の決議が出来た同じ年に発生した関東大震災の時には、アメリカより236億円(米価格換算方式、以下同じ)、イギリス55億円、当時の支那現在の中国20億円強、その他を含め340億円という巨額の救済資金を寄せられ、又全世界のR.CはR.Iを通じ又は直接東京R.Cへ503クラブから89,000ドルを送金せられ、感謝というよりも日本全国民が驚愕したと報じられた様に、全世界の国々から大変援助されて今日があるのだから、ご恩返しというか、幸いお手伝い出来るのでありますから、今迄直接援助して頂いた国ではありませんが、人命に係る事であり、最優先して一刻も早く救済してあげるべきと考えますので、皆様もぜひ御協力下さいとお願い致しました。事前に、どなたにもお話しする時間もなく、山田会長も藤井がどんな話しをするか心配された事と思われませんが、出来不出来はともかく、責任だけははたし、山田会長と無言で握手した事を記憶してい

ます。

I. G. F 終了後、体調を崩され11月末か12月初め頃から休んでおられましたが、半年後の昭和63年7月12日、遂に亡くなられました。

峰先生も長い間療養されましたが、翌年6月9日、山田会長から一年もたたない内に続いて亡くなられました。亡くなられた原因は、はっきり伺っておりませんし、今となっては調べ様もありませんが、お二人は自分の命を縮められてポリオの為に戦死された様な気がしてなりません。貴重な御二人を失った事は誠に残念至極、ご冥福を祈念致すと共に、東京麹町ロータリークラブが、永久に栄える様に温く御見守り下さいさい。

尚、ポリオプラス計画は、予算を大幅に上回り、吾国は40億円に対し、48億9856万8638円、R. I は1億2千万ドルに対し2億2856万ドルと、共にお二人の尊い犠牲が数百万、数千万の人命を救った事は、まちがいのない事実であると考えます。

《付記》 1987年10月12日 中央分区 I. G. F. 発表抜粋

それでは「国際奉仕」につきまして、麹町の藤井さん、よろしく願いいたします。

**藤井(麹町R.C.)** ただいまご紹介を頂戴いたしました、東京麹町ロータリークラブの藤井吉兵衛と申します。

本日は「ポリオプラスについて」ということで御話しを申し上げるように、と承ってまいりました。

手前どもの東京麹町ロータリークラブは今から5年前でございますが、創立15周年記念事業といたしまして、ポリオについて、わずかな予算でございますが、現在の当クラブの会長であり、また全世界のポリオプラスのコーディネーターであります山田会長と峰会員に率先して南インドへお出かけをいただきまして、つぶさに状況を視察してきていただきました。それから立ち上がったわけでございます。その後、当クラブの事業から、258と、お隣の275のいわゆる、東京の両地区の事業として進んでまいりました。それがとうとうR. Iの仕事にまで進展してまいりました。

一クラブ、あるいは一地区では非常に問題が多うございまして、とても荷が重いというふうに考えておりましたけれども、R. Iで取り上げていただくことになりまして、全世界の100万のロータリアンの方々に協力していただけるということになりまして、まことにご同慶の至りというように考えている次第でございます。

すでにご承知の通りでございますが、全世界たくさんの発展途上国の中で、毎年、たくさんの幼い命が年間345万人亡くなるという報道がございます。一説には500万という説もありますし、いろいろな説もございますが、山田会長に伺ったところでは、これがいちばん正確で



あろうということでございます。

345万人ということでございます。1時間に349人、1分間に6.6人でございます。本日、I.G.Fが始まりまして、ただいま1時間半経過いたしております。1時間半たちますと、今、この会場におられる方は全部お亡くなりになってしまう……(笑)。決して嘘ではなくて、そういうことでございます。そのくらい大変なことでございます。

わが国の総理大臣が、日本航空の飛行機がハイジャックされましたときに、「人間一人の命は全世界の地球よりも重い」ということを言われまして、刑務所に入っていた犯人を超法規的に釈放いたしまして、わざわざその国まで送りまして、人質と交換をしたということがございました。そのぐらい人命というものは尊いということは、もう申しあげるまでもないことでございますが、とにかく、こうやっている間にどんどん亡くなっていくということは大変なことでございます。

それをR.Iが1億2000万ドル、日本円にいたしまして約200億円のお金を調達いたしまして、この撲滅に協力をしようじゃないか、ということになったわけでございます。わが国に対しましては、全世界のロータリアンが100万人、わが国のロータリアンが10万人でございまするので、その1割でございますが、募金額につきましては諸般の状況にかんがみまして、1割でなくその倍ということで、40億円というのが当面与えられた寄付といいたしましうか、募金の目標の数値でございます。

当クラブといたしましては、昨年度、私は世界社会奉仕委員長を仰せつかりましたが、その関係で、昨年度のポリオの募金のガイドラインといたしましては、会員1人当たり4,000円、5年計画で2万円。当クラブは正確には98人ぐらいだったんですが、100人近いわけでございまするので、割り当てといたしましては200万円ということございました。23-34については後ほど申し上げますが、事態は一刻を争うわけござ

いまするし、またこれを継続事業にするよりも単年度で処理をしたほうがいいだろうということで、各委員会のご協力をいただき200万円をかき集めまして、年度内にご送金申し上げたわけでございます。

本年度は、そもそもロータリアン以外の企業にご寄付を頂戴するという当初の計画でございましたけれども、現在の経済状況その他から見まして、非常に困難であるというようなことから、引き続いてロータリアンがそれに当たるということになりました。当クラブといたしましては、当クラブのメンバーの方々にお話をいたしまして、大体1人当たりいくらということではなくて、ポール・ハリス・フェローが1,000ドルでございいますが、ただいまの交換レートが150円でございしますので15万円ということでございますが、免税措置もついておりまするので、お願いをいたしまして、何とか目標値は達成できる予定を立てさせていただいております。

この問題につきまして、いろいろと解釈があろうかと思えます。今度のポリオプラスが23-34というものに抵触しておるのかしていないのか、いろんな考え方があろうかと思えます。私どものクラブといたしましては、抵触している・していないはともかくといたしまして、先般、白石ガバナーが公式訪問で当クラブにお見えいただきましたときにお話を賜りましたけれども、大正12年の関東大震災のときに、アメリカのロータリーから八万九千なにがしかのお金をお見舞として送っていただいたわけでございます。当時は東京クラブができたばかりでメンバーの数が44というときに、八万九千なにがしという金額でございします。おそらく、今の貨幣価値にするならば、8億9000万円か89億円かわかりませんが、非常に多額な金額だろうと思えます。びっくりするようなお金を、できたばかりの東京ロータリークラブに送っていただいたわけでございます。

また戦後を考えてみますならば、焼け野原になってしまったときに、アメリカからいち早くDDTを、発疹チフスの予防ということで送っていただきました。また食べ物がないうちに、アメリカのMSAという、マーシャル元帥が提唱されました援助法で、わが国に小麦粉とか砂糖とか、食糧を送っていただきまして、ようやく今日の日本に立ち上がることができたということでございます。

このご恩に対しまして、今、現実に困っておられるアフリカを初めとする発展途上国の方々のために、われわれは40億円を集めまして、一刻も早くお送りするということが、今の日本のロータリアンに課せられた使命ではないか、というふうに考えておるわけでございます。

23-34というものは、非常に古いわけでございますけれども、今読み返してみましても、非常に立派な哲学を含んだ決議でございます。ちょうどこれができたのも、当時、アメリカで問題になりました、やはりこれもポリオのために23-34という決議に発展をしていったように伺っております。しかし、この決議もできましてからもう64年が経過しておるわけございまして、果たして今の時代に合致しておるかどうか、いろいろとお考えがあらうかと思えます。

昨年行われました規定審議会におきましては取り下げになりまして、可決にはならなかったようでございますが、'89年に開催されます規定審議会において、これと同じかどうかわかりませんが、ロータリーの基本になります、ある意味において憲法のような存在じゃないかと思えますが、当然、これが提案されるというふうに考えております。新しく制定されます89の、幾つになるかわかりませんが、決議に対しまして、われわれは非常に期待をしたいというふうに考えております。

どうか、そういうようなことで、新しくルールのできることだろうと思えますし、また一刻も早く援助の手が届きまして、一人でも早く救

済されることが望ましいのではないかと考えております。

なおもう一つ、今、即効性はない問題でございますが、人口問題がございます。ただいま、地球上に45億の人類がおるわけでございますが、今世紀末にはこれが60億になり、21世紀には100億になるということが言われております。限られた地球上に100億ということでは、大変なことになろうかと思えます。またこの数値も、発展途上国の人口が爆発的に増えておりまして、先進国の人口は減少というような状態でバランスが崩れつつあるように聞いております。

これも一にかかってポリオプラスの影響があるのではないかとこのように考えます。一見、近視眼的に考えるならば、ポリオによって、あるいはそういう疫病によって人口の増加が減少されるように思っておりますが、それは全く逆でございまして、そういうことがあるからこそ、“産めよ、増やせよ”につながってしまうということでございます。ちょうど『イソップ物語』で、マントを脱がすのには、風をピューピュー吹くよりも、太陽の熱が燦々と輝いたほうがマントは取れるということと同じではないか、というように考えます。

どうかひとつ、人口問題は先のことかも知れませんが、当面の問題としてのポリオプラスにつきまして、東京地区のロータリーの方々の絶大なご支援をお願いいたしまして、ちょうど時間となりましたので、これで責任を果たさせていただきます。

どうもありがとうございました。(拍手)

**志村分区幹事** どうもありがとうございました。

それではこれから質疑応答に入るわけでございますけれども、ご質問、ご意見等何でも結構でございますが、どなたかございませんか。

**近藤バスターガバナー** 私は今、ここで発言してはいけないのかもしれませんが、質問が出ませんから、皮切りをさせていただきますよう。

4名の講師の方々がお話なさったことは、質問ができないぐらい明快であったということではないでしょうか(笑)。

実は私、途中から下へ降りてしまいましたけれども、この舞台上は非常に聞きにくいんです。私は難聴で補聴器を使ってもなかなかはっきりしないんですが、話される方の声によっても、わかり易い方とわかりにくい方とあるんです。実は新宿の樽松さんのお話は、大変おもしろそうだったんですが、全然わからなかったんです。大変申し訳ないんですが……。その他の方は少しはわかりましたが、いちばんわかったのは、今ここ(壇の下)で聞いた麴町の藤井さんのお話でございます。

ポリオプラス、藤井さんのお話はものすごくうまいですね。私はポリオプラスにはちょっとひっかかるところがあるんですけども、藤井さんの話を伺いますと、素直に受け止めて、「いいや、そのくらいのお金は出そう」と。そのかわり、気持よく協力するから、他の人に「出せ、出せ」とあまり時間をかけるな、と言いたいんですね。

そして今、日本全国、ポリオプラスの40億のお金を集めるためにだけロータリークラブの時間が使われてしまって、他のことが何も出来ないで、「おい、お金！ お金！」と言われているように思われる。ガバナーも嘔んでいらっしゃるわけでございまして……(笑)。

そうするとロータリークラブの本質的なものがどこかへ行ってしまって、カネ集めだけになってしまう恐れがある。これではいけないと思うんです。そのもの自体はきわめて重要で大事だと思う。で、私達は、協力できればさせてもらいたい、というような気持は非常にあるのでございまして……、いろいろありがとうございました。

次は山田さんへの質問です。現在、文明国ではポリオはもうなくなってしまったと思うんです。ところが文明国に住む、免疫が全くない人間ができてしまうと、そういう人たちがアフリカへポツと行くとポリオに

なる可能性があるという点についてです。で、何とかという学者がワクチン(生ワクチン)を作って……。

**山田(麴町R.C.会長)** セービンです。

**近藤パストガバナー** ああ、そうそう、セービン博士。われわれは知らないうちにセービンの作ったワクチンで免疫されているので安全なのだが、もし免疫が全部なくなってしまうと危ない。だからワクチンをしておいたほうがいいという話を聞いたんですがね。もしそうなら、「われわれはポリオに対して全く無関係ではなくて、うっかりすると危ない」という感覚が本当ですか。そのへんをちょっと……。

**山田(麴町R.C.会長)** ポリオは、野生のビールスというのが各地にございますものですから、日本は一昨年までの3年間、患者は1人も出ていません。ところが日本も昨年は1人出ています。これはワクチンを飲まなかったために起こっています。これはアメリカでも根絶ではございませんで、アメリカ大陸でもございます。それからヨーロッパでも患者は出ています。日本は接種率が95%でございまして、世界でも非常にいいほうでございますけれども、だいたい80%以上を対象にワクチンを飲ませますと、これは群れのエフェクトという効果がございまして、集団発生は防ぐことができます。しかしながら1人とか2人、それから3人とか4人とか、これはワクチンを飲まない限りは全然ダメです。

現在、文明国といえますか、高度工業国家のほうでは、だいたいワクチンをソークワクチンという注射のほうでやっております。ということは、ポリオの経口のワクチンというのは飲ませることが簡単にできますから、便利なことは便利なわけです。インドだとかインドネシア、それからアフリカなどの場合には、注射のときの消毒が非常に悪くて、煮沸消毒しないで、いわゆるアルコールでただ消毒して、一つの注射針でやりますものですから、実際に注射によってB型肝炎になってしまうとか

エイズになってしまうとか、そういうのが非常に多いわけです。

しかし、経口のセービンのワクチンというのはだいたい300万人に1人ぐらい、ワクチンを飲ませたことによってポリオになるというケースが起こってしまいます。そういう危険はあるんでございますけれども、価格の面とか、経口投与で簡単にできるということで、開発途上国では今のところセービンの経口生ワクチンでせざるをえないというところですね。それとこうした免疫接種はずーっとしてないと駄目なんですね。例えばフィリピンのケースでも、これは根絶できるというようなことは、なかなかできることじゃございませんで、R.Iが何年間かやって、そのあと、ちょっとやめたために、また爆発的にパツとでたとか、そういうことがございます。接種というのは常にずーっと免疫接種を続けていかないと駄目なんです。

**近藤パストガバナー** まだわからないところもありますが、この質問はこれでやめます。どうもありがとうございました。

**三野分区代理** 今、近藤先生から口切りの意味でお話をいただいたんでございますけれども、他に何かご質問ございましたら、どうぞ遠慮なく……。

4人の本日のスピーカーのお話、近藤先生もおっしゃったように、たいへん明瞭であったのだらうと思いますが、どうもご質問もないようでございますので……。

**志村分区幹事** それではご質問がございませんようなので、質疑応答はこれまでといたします。

**志村分区幹事** 引き続きましてフォーラムカウンセラー、近藤パストガバナーからお願いいたします。

**近藤パストガバナー** 大変いいお話をしていただきまして、ありがとうございました。

それからポリオプラスについては、さすが藤井さんの地区委員長の貫禄にふさわしい、説得力のあるお話を伺いまして、ほんとにありがとうございました。協力させていただきます。

**志村分区幹事** それでは白石ガバナー、感想をお願いいたします。

**白石ガバナー** 私、感想なんて申し上げる資格は全くございません。一つ、ガバナーとして最後の挨拶ぐらいのところで申し上げさせていただきたいと存じます。

日本ポリオ委員会からポスターがまいっております。で、今日持ってまいっておりますので、あとで阿部幹事さんから各クラブの代表の方に……もうお渡しもうしあげたんですか。どうぞよろしく願いをいたします。

それからポリオのことについて、山田さんから「最近のポリオについて、ひとつ情報をいただけないか」ということでいただいてきておりますので、簡単に申し上げます。

全世界的に非常に盛り上がりまして、アメリカ政府の国際開発機構、そんなのがあるんでしょうか、そこから600万ドル、ポリオに寄付があったそうでございます。それからイギリスでも、これはどういう形なのか知りませんが100万ポンド、といたら相当な金額になりますが、ポリオに寄付されております。カナダはいちばん早く、政府として150万カナダドルの寄付がございました。それからドイツもノルウェーも政府がポリオに寄付をされております。そして1億2000万ドルの目標でございますが、現在、五千何百万ドル達成されております。

それで近藤先生からお話がありましたことは、実はこのあいだ、札幌でロータリー研究会というのがございまして、ガバナーとパストガバナーが400人ばかり集まって勉強会があったんでございますが、その席上やはり「ポリオの件は早くすまして、ロータリーは本来のことに取り組



むべきじゃないか」というご発言があったことは事実でございます。それにつきまして猛烈に反発いたしましたのが、私ども現在のガバナーでございまして、ポリオのことにつきましては、二度と三度と変更がありまして、それで日本は今、1990年から'91年度までの5カ年の企画として、私どもは皆様をお願いして回っております。「それをまた、急に早くしろなんていうことを言われますと、一体、ガバナーの立場はないじゃないか」ということで、猛烈に食いつきました。それで最後に、日本ポリオプラス委員会の渡邊和美委員長が「変更はない。今までのことで、ひとつガバナーはやっていただきたい」ということがございまして、ホッとして帰ってきたわけなんでございます。

近藤先生ご心配の、ポリオだけでは、そちらのほうがお留守になってしまうのではないかというご心配、これはもっともだと思いますが、この地区に関するかぎり、私はその懸念は一切感じておりませんので、先生、どうぞご了承いただきたいと存じます(拍手)。

(以下省略)

## 亡き友のおもかげしのぶ花ふぶき

1973. 2. 24 入会

垣 見 尚二郎

故山田彝さん、峰英二さんの御二人は国際ロータリーのポリオプラス活動の為、南インドに2回に亘りポリオワクチンの供与の為出張され、不幸にも風土病に罹り亡くなりました。

御二方の御冥福をお祈り申し上げます。

山田彝さんとは私が会長になりました時、副会長をして頂き、大変お世話になりました。

峰さんとは1973年2月、一緒に入会されたかたです。

御二人共、若い時からのスポーツマンで、更にお酒も大変好まれた方でした。

山田さんの音頭で「食べ歩きの会」で一緒に楽しく過ごした事が思い出されます。

今丁度、私の家の前の東玉川神社の櫻が満開で、今日は朝からの強風で櫻のはなびらが花ふぶきの様に舞っています。

4月22日

## 会者定離 山田 彝さん追想の記

1974. 2. 25 入会

鈴木 清 二

私の記憶が正しければ、山田さんが生まれたのは1924年で、ご存命ならば70才になるはずである。スポーツ万能で麴町の通りを颯爽とサイクリングをしているのをよく見掛けた。それが忽然と世をさってしまうとは……。

病床でどのような想いをして居られたかと思うと、万感胸に迫ってしまう。死は誰にも訪ずれるものであるが……。

山田さんは日本人離れした云わば平凡な私などに比べれば、一オクターブも二オクターブも違った人である。個性も非常に強く体力にも自信があったが、偶々或る人が彼に腕力沙汰の喧嘩を酒の上で挑んだ時に私が居合わせた、彼の冷静な処理の仕方に感心した事がある。

私は彼を回顧する時、いつも彼の父君「きだ みのる」を思わざるを得ないので「きだ みのる」について私の知っている事を少し書く事をお許し願いたいとおもう。

「きだ みのる」は鹿児島県奄美大島の出身で、後台湾に一時移住し、結婚するころは東京四谷大京町に住む事となる。故郷で古風な武士道的な環境で育った「きだ みのる」に、この亜熱帯の、当時植民地であった台湾の生活が大変な精神的変革をもたらし、異種文化はエキゾチズムに対する嗜好を芽生えさせたと思われる。

其の後、偶然の機会からアテネ・フランセの創始者ジョゼフ・コットと出会い、詩歌を愛した「きだ みのる」はフランス文化に傾倒し、その後、パリのソルボンヌに留学する事となる。その間、恋愛問題から親、親戚から勘当されたり、思想の左翼化から日本大使館から忌避されたり、自由な交友範囲の広さがコスモポリタンの性格を形成し、自分の感情を自由に表現し心の欲するままに行動し、深い愛情がありながら家族に束縛されることを嫌い、それに纏わるわずらわしい問題から逃避し、一所不在の放浪の生活を一生送る事になる。その間、その類希な才能でファーブルの「昆虫記」を全訳刊行し、「気違い部落周遊旅行」により毎日出版文化賞を受賞。その他数々の著作をあらわした。

また「食」に対する興味が非常に強く、思惟や芸術まで食文化から解釈する傾向さえあった。

三好京三及び一時話題になった「きだ みのる」の連子について山田さんと話した事があるが、三好京三の著作で書かれた老境の悲惨なしかも傲慢とまで云われた「きだ みのる」の晩年の生活を語る山田さんの悲しい眼を忘れる事が出来ない。

私がなぜここに「きだ みのる」について書いたかと云うと、山田さんを知っている人々の大方の同感を得られると思うが、私は山田さんの性格のルーツを「きだ みのる」にみるからである。

山田さんはその知力、感性に加え、恐らく理性では判るが云い知れない子供としての寂しさを高め、人に対するやさしさ、そしてそれを社会に対する奉仕まで高揚させた山田さんの偉大さ、実行力に我々は多くを学ばねばならないと思う。

全生活をかけてのポリオプラス活動は、余人の出来難い事である。ポ

リオプラス活動は成功裡に一応初期の目的を終えたかの印象をお持ちの方が多いが、例えばキューバでは未だに小児麻痺が蔓延し、ソビエトの経済的な援助がない現在、秘かにメキシコを通じ国際ロータリークラブにポリオプラス運動を広げる事を、非公式に嘆願し、国際ロータリーもこれに応じワクチンを供与している事実を知っていただきたい。

今、また日本政府が日米新経済協議の柱の一つである「地球的展望に立った協力」分野の対象項目に、ポリオ撲滅に向けたワクチンの提供を提唱した事は、山田さんの先見性を如実に示している。

山田さんの運動が、今世界の小児麻痺の人々に愛と援助を与えつづけている事を、私は東京麹町ロータリーの一員として誇りに思うと共に、山田さんを知らない会員の方々にも、このような奉仕活動を継承、発展させていただくよう心からお願いしたいとおもう。

## ツネさんとミネさん

1975. 5. 10 入会

渡邊貞治

私が麴町ロータリークラブに入会したのは1975年5月で、筒井光康さんが会長の時であるが、間もなく1975年～1976年度に入り、権田さんが会長に就任された。その年度はツネさんもミネさんも理事をなさっており、新入会員であった私も炉辺会合等を通じて親しくおつきあいするようになった。

ツネさんはなかなかの食道楽で、彼の提案で1976年の12月に第1回「食べ歩き会」が行われ、可成の人数が参加したと記憶している。

ツネさんは此の「食べ歩き会」を通じて会員相互の親睦と、ロータリーの理想について話し合う場を設けたかったのである。

ご両親が社会的に著名な方の子供として育った故か、良くも悪くも多分にお坊ちゃんであり、理想を追い求める純粋な人であった。

このことが後年(1982年1月)3H活動の為のインド行きとなり、次いで南インドのポリオプロジェクトにのめり込んで行くことになる。1983年2月にクラブ内でインドのポリオ撲滅の為、ポリオプロジェクト実行委員会が開催され、第1回目の実行委員会が開催されている。

そして第1回の実行委員会が開かれてから丁度1年後の1984年2月に、ツネさんとミネさんが南インドにボランティアとして出発することになる。

当時お二人から聞いた話しであるが、ポリオワクチンを気温の高いインドに送る為には、低温を保った状態での輸送が絶対に必要であり、現地に到着してからの低温保管、更には各地への再配送等々、ワクチンの管理に大変な苦勞があったようである。

ミネさんは千葉医大を卒業したお医者さんで、当時九段坂病院に勤務されて居たと記憶するが、勤務医としての多忙な時間を犠牲にしてのインド行きであった。

ミネさんは非常に好人物で、人からものを頼まれた時には余程のことが無い限り、ニコニコと笑顔で引き受けて下さる人であった。

たまたま私の旧制高校の先輩でもあった関係で、よく銀座方面に繰り出して酒を飲み歩いたが、アルコールが入れば仲間の下手な歌に合わせて、店にあるカスタネットやマラカスを持ち出して打ちならし、その雰囲気は大いにエンジョイする方であった。

ツネさんとミネさんのポリオ撲滅の為の運動が地区の計画となり、更にはロータリー全体の大きなうねりとなって行ったことは皆さんご承知の通りである。

現在の平均寿命からすれば、お二人共早目に相次いでこの世を去って行ってしまわれましたが、人を愛し、ロータリーを愛した人達であり、世界の不幸な人々の為に、正に文字通り献身的な奉仕活動を行ったことに対して深く敬意を表する次第である。

お二人が逝かれて数年経つが、今でも在りし日のあの元気な姿が想い出され、痛惜の念を禁じえない。

以上

## 山田・峰両先輩の思い出

1975. 10. 20 入会

遠矢洋二

通称つねさんと気安く呼ばさせて頂いた山田さんとお別れして既に6年の月日が経過している事を聞かされて、唯々時の流れの早さにびっくりしている今日此頃です。偶々約20年前に従兄弟の久木野氏にロータリー入会時に郷里薩摩の先輩山田兄だと紹介された事を良く記憶しております。それ以来ロータリーの何かを機会ある毎に良く教育して下さいました。

又、旧制高等学校の最後の良き時代のバンカラを通じて形成された人間像等についても良く話しをして下さった事等、良き思い出となっております。

一方、峰先輩にもまめに人の為に尽す事がどんなに楽しい事かを教えて下さった数々の思い出があります。現西武百貨店社長の和田君と共に九段坂病院をお訪ねした時の思い出、その後の心暖まるアフターケアの数々、フィジー島に数組みのロータリアンと訪問した時の事。電気釜を持参されたが電気がなくて用を足せなかった事など、数々の思い出が彷彿して参ります。

このお二人が御自分のすべてを投げうって世界のポリオ撲滅の為に尽くされた社会奉仕活動の業績は、我が東京麹町ロータリークラブ発足以



来の快挙であり、クラブ会員の胸に深く刻み込まれているものであります。

お二人の功績を顕彰する組織の中味も、もっと意義のあるものにして、その業績を後輩の為にも力ある限り語り継げる様努力をして参りたいと存じます。

平成6年2月吉日

## 拝啓 山田彝様、峰英二様

1978. 1. 30 入会

中 川 淳

山田さん、彼の地へ慌ただしく旅立たれ、驚天動地。そちらの居心地はいかがですか。極北の地の寒さですか。灼熱の地の酷暑ですか。春風薫りあたりの音は迦陵頻伽のようですか。

当地のごとく人間関係を始め諸々の煩わしさがありますか。

多分、山田さんはこの地で立派な人生を務められましたので、いま頃、環境豊かなる彼の地で愛酒ギリシャブランデーMETAXAを片手に、時間に追われることなく心よりのんびりとお寛ぎと推察いたします。

私は、麴町ロータリーに入会後の人生のたった10年間の短い期間ではありましたが、多岐にわたり特に人間道につきご指導戴き、師としました管鮑の交わりの友とし、いつまでも心の底に焼きついております。

貴方は、博学多才で健康に留意されてきました。

文学、歴史、科学、芸術等々を始め料理技術に至るまで、特に外国語では12ヶ国語をマスターされ、その内タイの王宮の言葉が一番難しかったと云っておられましたね。

また、水泳は固より、休みの日は麴町の自宅より横浜までサイクリングなので鋼鉄のような脚筋肉だと誇示され、食べ物にも非常に関心大でよくあちこちのお店へご一緒させていただきました。いつも「乾杯、乾杯」と杯を一気に空け、ある時、スペアーリーブの骨までバリバリと胃の

中へ収納される健啖家にはあなたの目玉に近いほど一瞬私の目も突出いたしました。

興にのるとゴリラを真似、ご自分の健康表現のごとく両手で胸を叩いておられましたね。

大変失礼ではありますが貴方のことを“トッチャン坊や”と称しておりましたが、それは少年の純な心とより優れた大人の高度な頭脳を兼ね備え、不羈奔放なホモサピエンスでしたね。しかし、豪放磊落な一方非常にナイーブな面があり、ピロードのような木目の細かい気配りをお持ちでした。

とかく当地では、いくら圓が強くなったとは云え、彼の地まで財産、地位を持参できると錯覚されている心貧しい人達のことをいろいろご教授いただき感謝しております。

今にして思えば、ある日自宅にお電話をいただき、錦糸町の墨東病院にお見舞にお伺いした折、しきりに検査の結果、「肝臓癌ではなかったよ」と再三云われるので、また元気な姿にお目にかかれると思っておりました。その後突然、中近東の絨毯をお送りいただき、近々お礼にお伺いしようとした矢先、急に旅に出られました。返す返すも残念です。いまは、形見の品だったのだと大切に使用せず保存しております。

峰さんの思い出は、千代田ローターアクトの青年をわが子の様にかわいがり、活躍され、当クラブの健康管理委員会主催のフォーラムで私が司会をやらせていただいた折、峰さんがパネラーとして最後の締め括りとして「皆んな元気で長生きしましょう」との言葉がいまでも昨日のように胸に残っております。

お二人とも個性豊かな人でロータリーポリオプラスのため不惜身命を

誓ってインドで活動され、名誉の戦死と称されても過言ではないでしょう。

いま頃は彼の地の武陵桃源で美酒を酌み交わし、この地の人々の生き方の議論をされているでしょう。そして彼の地のロータリーでさぞかしご活躍と推察されます。

我々も「散る桜 残る桜も 散る桜」。遅かれ早かれ参りますので、その節は再度ロータリーに入会いたしたく思いますのでご推薦お願い申し上げます。

敬具

山田兄 再謹表示哀悼  
峰 兄

1981. 10. 12 入会

早川 健一

光陰似箭、時間有如流水

御二方が逝去されてから久しくなりますが、今もって私の心の内には鮮やかな映像として残っております。

御二方は、あまりにも純粹であり、俗世に生きる「すべ」を御存知なかったのではないかと思われてなりません。

私は山田兄の御尊父が八王子在に寓居を構えられたころから御交誼にあづかり色々とお教示をいただきました。そして麴町ロータリークラブで山田兄と親しくなる幸せな機会を与えられました。

峰兄とはローターアクトのことで一方ならず御指導いただき、銀座の夜間例会には時折メイクアップの機会を与えられました。そのようないきさつで御二方の思い出は、走馬灯のように浮び面白うて、やがて寂しき独り言を繰り返しております。

書は言を尽さず、言は意を尽さずであります。

去る者は日に以って疎しとは悲しい言葉です。

合掌

## 山田・峰両兄 追悼

1982. 11. 8 入会

園田和朗

私は1982年11月麴町ロータリークラブの一員となった時、両兄には格別お世話になりました。峰君は旧制成城高校の同窓ということもあり、また山田君は持前の親切心から、懇切丁寧に私にロータリアンとしての心得を伝授してくれたものです。

両兄について特筆すべきは、両君が文字通り身を挺して推進した印度ポリオ撲滅運動が、やがて国際ロータリーの一大キャンペーンに拡大されたことで、これは我がロータリークラブが世界に誇れる業績であると信じます。

山田・峰両君 以って瞑すべし

先年、外国人ビジター向けの当クラブ英文パンフレットを作製するに当り、委員一同相談の結果、ポリオプラス・キャンペーンの由来について、次の様な一文が挿入されることとなった。

We take pride in the fact  
that the Polio Vaccination Program for  
Madras in India 1983,  
was initiated by our Club and in effect inspired  
the worldwide Polio Plus Campaign of Rotary International

両君のこの輝かしい業績が、徐々に忘れ去られようとする昨今「山田・峰社会奉仕賞」が設けられたことは、誠に時宜に適した措置であり、ここに両君の御冥福を祈る次第であります。

## 山田ツネさんの思い出

—「足の先から泳ぐ」が取りもつ縁—

1984. 1. 9 入会

黒 沢 亮 平

私が麴町ロータリークラブに入会して間もなく、幹事の大役を仰せつかりました。

事務局の鶴田さんの御指導のもとに分からないながらも、何とかやっている時に、プロのロータリアンの山田ツネさんに出会いました。何事も一言申し上げねば気の済まないという性格の人でした。年は私より12歳上です。

ある時、例会後私に「ちょっと話がある」というので別室で話を伺いましたところ、山田さんはこう云いました。

「黒沢幹事に聞きたい事がある。それはいつも役員会の時に私が意見や提言をしたりしているが、それに対して幹事はこう云っているそうじゃないか『山田さんはウルサイ人だから右の耳から聞いたら左の耳から出し、左の耳から聞いた事は右から出すのだと……』それは本当かね、もしそれが本当だとしたら大変失礼な話ではないか」と、いくらか気色ばんで云うものですから私が「だからといって何か提言した事についてやらなかった事がありますか。もしあったら思い出して下さいよ」といいますと、何か考えていましたがプイット起って行ってしまいました。

それから数日後、懇親会か何かの酒の席で隣同志になりました。山田さんが水泳の自慢話をしていましたから、私が「足の先から泳ぐ競争を



しませんか」というと、何を言うかといった顔で睨みましたが、私が冗談でもない顔をしていましたので、ジッと考えてから「どう泳ぐのだ」と聞くものですから私が説明をいたしますと、ただ黙って聞いておられました。

それから数日後、私に「幹事に水泳競技の入場券を持ってきた」といって何枚かくれたのです。そして私に「自分は今、青少年の水連の手伝いをしているが、一緒に手伝ってくれないか」と言ってくれたことを覚えております。そんな事から打ちとけると、なかなか酒は好きですし、話題は豊富な面白い人でした。

印象に残る話としてはポリオについての話があります。インドの田舎に行くと、病気になるのも何事も運命だからと思って、予防接種も嫌がる人達がいるとのことでした。

それにしてもあれほど元気な山田さんと峰先生がインドから帰ってポックリ逝ってしまうとは、どう考えたらよいのでしょうか。

(まだ足の先から泳ぐ競争もしていないと云うのに)

奉仕や布施は運命や天命に結び付かないのでしょうか。

## ポリオ・プラスで思う事

1986. 12. 15 入会

飯 嶋 庸 夫

ポリオ・プラスの世界における最初の提唱者が我が東京麹町ロータリークラブの故山田彝氏と故峰英二氏で有った事に思いを馳せる時、お二人の偉業の成果は・・・1988年5月19日フィラデルフィア大会でポリオ・プラス募金活動の大成功として実現致しました。

大成功が発表された時、沸き上がったロータリアンの拍手と大歓声は、会場の外でも十分に聞こえる程のものだったそうです。募金総額は目標額1億2千万ドルを80%上回る金額でポリオ・プラスキャンペーンは、ロータリー史上、最大の規模を誇る、大成功を収めた活動であった事は、我々ロータリアンの記憶に新しいところであり、今は亡きお二人もどんなにか喜んで居られた事でしょう。

この募金活動の終幕を飾る式典で、国際ポリオ・プラスキャンペーン委員長(元理事のレスリ・S・ライト氏)は、『私達の募金活動は単に目標を達成する一つ的手段に過ぎず、目標とは全ての子供にポリオの脅威から守るための予防接種を実施する事です。』と語っています。

この精神を、自ら率先して実践された人が故山田氏と故峰氏で有ります。お二人はインドに旅行された時に、如何に多くの子供達がポリオの脅威に冒されているかを目の当たりにし、ポリオからロータリアンとして何とか救う事はできないかと痛感された事でしょう。

故山田氏は、国際ビジネスコンサルタント（富士ゼロックス社の海外事業部長、東南アジア地域支配人の要職を歴任）としての広い視野に立ち、又、故峰氏も医師（東京逋信病院・九段坂病院・熱海温泉病院に勤務、千葉大学医学部講師）として、人道的な立場から、ポリオの脅威から子供達を守らなければとの強い使命感にお二人は燃えてポリオ・プラスの活動を始められた事と思います。

そんな事からお二人は国際ロータリー本部にポリオ・プラスの必要性を熱心に提唱しそれが実現を見、今日の様な大きな活動と成りました。

ポリオ・プラス活動の献身的なボランティアを続けられたお二人の精神は、今もいや将来に亘り、脈々と我が東京麹町ロータリークラブを通じ、全ロータリアンに生き続く事でしょう。

私は、この様な偉大なお二人が居た東京麹町ロータリークラブに席を置く事の誇りと幸せを感じると共に、お二人の築いた尊い足跡に恥じないよう頑張らなければならないとの思いで一杯です。

終りに際し、お二人の御冥福を心からお祈り申し上げます。

ポリオ・プラスの委員を務めさせていただいた事で、ふと思ひ書かせて頂きました。

以上

## 素晴らしきお二方を偲んで

事務局員

鶴田和子

山田元会長様、ドクター峰先生との「思い出小冊子」発刊にあたりまして、私にもページを分け与え下さいました事に感謝致し、拙いながら一文寄せさせていただきます。

1973年3月知人の紹介で、始めて麹町ロータリークラブの事務局を訪ね、時の森山幹事さんにご挨拶を致しました折、そこに、背を屈め鼻眼鏡をかけて懸命に英文タイプライターを打っておられた、大きな体型の山田様がおいででした。お仕事の手を休め、「ヤアーいらっしやい」と風貌からは不似合いな優しい声をかけてくださいましたが、その時が山田様との初対面でございます。

幸せにも、それから今日まで延々当RCにご厄介になっておりますが、その間、当の山田様は、1978年に幹事・84年には会長をお務めになりました他、海外RCとの児童画交換や図書交換プログラムの実施を始め、地区の世界社会奉仕委員長なども歴任され、そしてポリオプラスプロジェクトでのご活動と、次々にアクティブなご奉仕を重ねられました。私もご一緒にお手伝いをさせて頂きましたが、本当に楽しくそして、実に多くの事柄を学ばせて頂きました。

当時は権田元会長ご命名による「川端会」という食べ歩きの同好会が月例で開かれておりましたが、山田さんは、その幹事役を買って出られ、

ダイエットしなきゃーを再々おっしゃりながら喜んで食通振りを発揮しておられました。

時には、アメ横で食材を仕入れての手料理の話、お得意の英語による自詠詩集発刊(1冊頂戴しましたが)の話、東京高校時代よりのご自慢の水泳の話と、窓外が暗くなっても終わらず、アフター5はグラスを片手に興味深い話題が延々と続くこともしばしばでございました。

あの個性豊かな独特の語り口は、今なお鮮明に懐かしく思い出されず。

そして、病床より数通のお便りも頂戴いたしましたが、明日にも会長職にご復帰頂ける様な文面でした。しばしのご静養とばかり信じておまして、お見舞も叶いませんでしたのが、心残りでなりません。

また、峰先生は九段坂病院のドクターで、クラブでは珍しく2度にわたり親睦活動委員長を務められました他、お仕事柄、常時皆様の健康相談にもまめにアドバイスしておいででした。その上、万年ソングリーダーとSAAでも大活躍され、10年以上も私一人の事務局で過ごしてこれましたのも、力強い峰先生のご援助によるところが大変大きかったからこそといま、思い返しても、感謝の気持ちで一杯でございます。

そして、先生には友人始め私の家族もホームドクターのように親しくお世話になりました。また、常日頃健康に過ごせますのも、色々と養生訓を授けて下さいましたお陰と固く信じております。

突然体調を崩され、お休みの続きました例会は、いつも心細い思いを致しておりました。先生の病室の壁には、ダンディーなスーツが掛けられロータリーバッチが輝いておりました。

お亡くなりになる数週間でしたか「来週でも調子がいいとオータニに

いくからネ」とおっしゃった言葉が、いまも耳に残っております。

本当に、素晴らしいお二方は、揃ってお優しく、お酒が大好きで、人を、そしてロータリーをこよなく愛しておいででした。

一年足らずの間に、続いて天国に旅立たれましたが、どうぞ安らかに  
お眠り下さい。心からご冥福をお祈り申し上げます。

## 思い出の中から

エレクトーン奏者

志村千陽

今ペンを取り思い起こしてみますと、山田様、峰先生には本当にお世話になり、改めて感謝の気持で一杯です。沢山の楽しい思い出の中から、少し綴らせて戴きます。

山田様は以前、私の実家のすぐ近くにお住まいで、道でよくお会いしたものです。美しい奥様と並んで歩いていらしたあのヒップの高い日本人離れしたスタイルが、上智大脇の坂道と共に思い出されます。

食通でいらした事は有名ですが、ある時上野でバッタリお会いしました。丁度お肉を買いにいらっしゃる所で私共も案内して頂き、おいしいお店を教えて頂いた事もありました。

一番印象に残っておりますのは、狸穴のアメリカン・クラブで催された外国人のピアノの演奏会にお誘い頂いた時の事で、吉川様も御一緒でした。その時のアーティストもプログラムも残念乍ら忘れてしまいましたが、ピアニストが直接聴衆に語りかける暖かい雰囲気コンサートの時、山田様が英語を逐一訳して下さい、私も皆と一緒に笑ったり出来たのでした。

後年、峰先生も山田様と御一緒にインドへ奉仕に行かれた後「Teddy（山田様の通称）はインドの方言まで話してしまうし、全く彼の語学力は天才的だ」と仰有っていらっしゃいました。

“Bei mir bist Du schön”

この歌を聴く度に峰先生を思い出します。十八番にしていらしたこの曲だけでなく、ハワイアン・ソングにも造詣が深く、何曲も原語で歌われるので、私共は「先生、どうしてそんなに歌詞を覚えていらっしゃるの？」と尋ねたものでした。

銀座にお誘い頂いた時は、よく「お父ちゃんを呼べ」（亭主の事）と仰有って下さり、夫婦共々本当に楽しくアルコール漬けになりました。腰を屈めてマラカスを振っていらっしゃるお姿、今も目に浮びます。

又、動物がお好きで「北海道の畑正憲さんの所に行き度いんだ」と常々話していらっしゃいました。宴会のお帰りに我が家の猫三匹に会いに来て下さる事も度々、正にムツゴロウさんにそっくりの仕種で床に座り込んで猫と遊んで下さいました。三匹共、同じ模様なのに先生はちゃんと識別して下さい、年賀状に猫の名前まで書いて下さる程でした。そのままピアノとエレクトーンに挟れた“気を付け”の姿勢でしか寝られないスペースに泊まって下さり、朝になると“みの字より”と書き置きを残して、私共が眠っている間にそっとお帰りになりました。（きっとこの書き置きをもらった人は沢山いるのでは…… なーんて余計な詮索はやメにして）

旅行にいらした時には必ずお土産を買って来て下さった事や、風邪をひいたと言っては九段坂病院の泌尿器科を訪れたり、思い出は尽きませんが、おみ足が御不自由になられた折、例会の帰りに近くの駅まで私のヘボ運転でお送り出来た事は大きな喜びでした。

お別れの日が近付き、涙をこらえて病室に伺った時、「やりたい事は、全部やりました！」の一言。忘れられません。



最後に山田様、峰先生と御一緒させて頂いた思い出として、夜中まで六本木にいた事がありました。鈴木様も御一緒に、とても楽しく話に花が咲き、時の経つのも忘れてしまい深夜帰宅した所、その日に限り結婚前の主人から何度も電話があり、母に猛烈に叱られましたが、今となりましたはとても懐かしい思い出です。

---

1994年6月20日 発行

---

**東京麹町ロータリークラブ**

〒102

東京都千代田区平河町 1-3-8

平河町プラザ 501号

電話 (03)3263-9220

---

## 思い出草

---

2016年4月1日発行

東京麹町ロータリークラブ

〒102-0093

東京都千代田区平河町 1-3-8 平河町プラザ 204号

TEL 03-3263-9220

FAX 03-3263-9122

E-mail : office@koujimachi-rc.jp

URL : <http://www.koujimachi-rc.jp/>

---

\*1994年6月20日に発行された書籍の復刻版です。